二十四輩順拜圖會

越後

四

二十四輩順拜圖會巻之四

目録

○孤後之部

念佛堂
浄苦寺
押上村
亀まり坂
光智法印
史牛
池井
藻いとり
北山浄光寺
新浜の宿
二條の浜
三度栗
布乃名号
浄福寺
川孤名号の由来
虎茂氏の古塚
孤後縁の岡屋
三條御坊
逢坂之藪
金波山浄光寺
太子堂
焼栗の林
八房ノ梅
扇屋舊跡
功徳地乃渕
河内名寺
恭慶乃社
繋馬
西方寺
真浄寺
託明寺
孝順寺
亟乃信寺

心覚寺

照光寺

以上

願教寺

荒井御堂

念佛堂

在る如来春日の作此所は高徳聖人の眞像在ます元禄二年十月二日國府五智の如来堂回禄の附高田の来迎寺に入る法堂の方へ走り行くふ又十歳ばかりなる侍木像を抱へ持ち来ていふ中いふ此木像は親鸞聖人の御真像也汝は先と到るなる發いらんせ〜〜念心は法〜紙侍は忽行方なし念心押て後き出る来迎寺へ入奉て信心なるをやうなる其後享保年中此所に一宇を造立する像と安置せり武州本條唐戸の義は告曰く我月神脳〜〜体脂〜て得る法脂と唐戸の義光て寄来のちひとなし告は法せてる像と体法せんとせ〜は何中ん脂

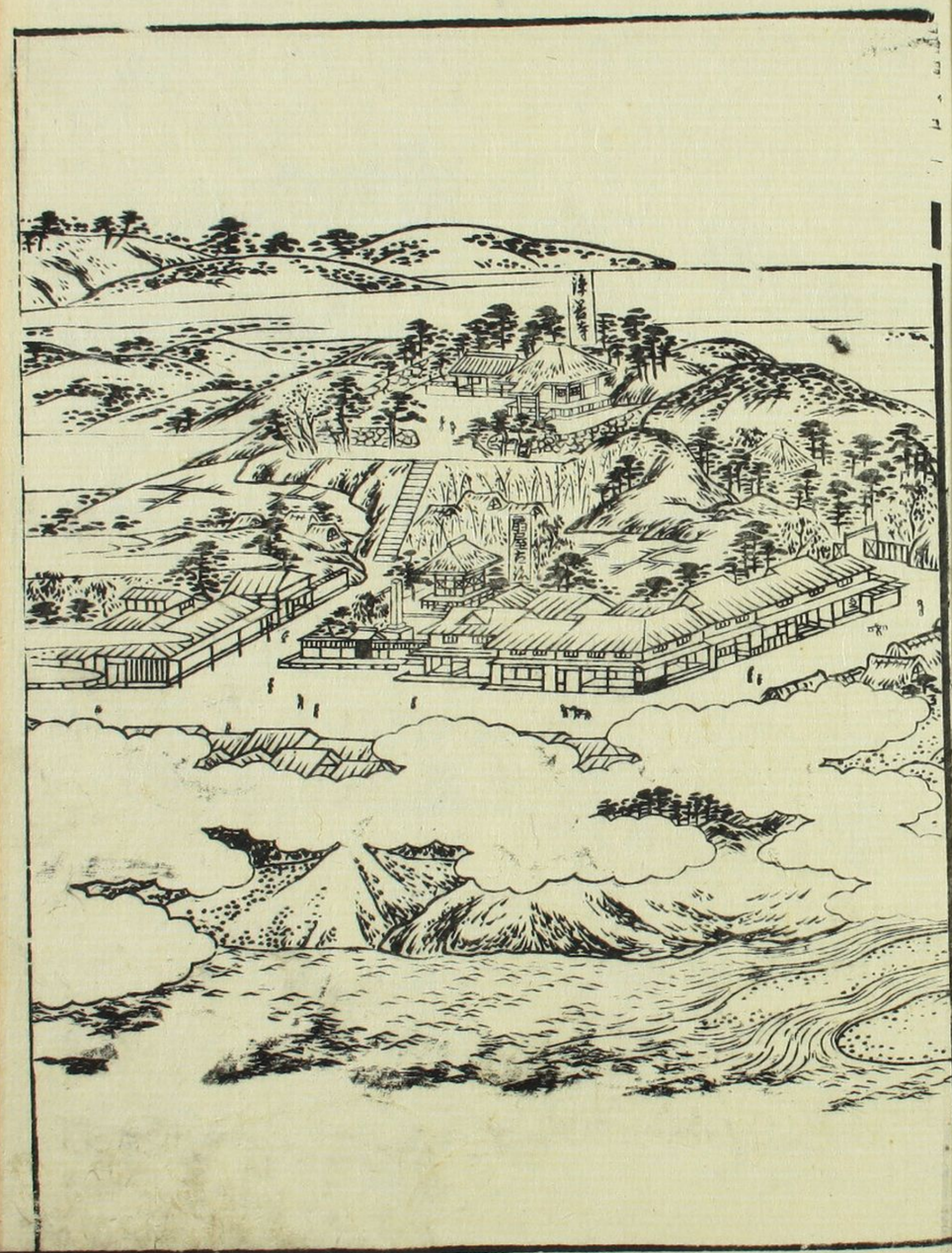
念佛堂
御本尊

中より物の出でとりつぎ小ぶろひ座中の衆より勝て見さうれば中座は
て漆塗の小箱み見を開きうれば聖人の御真筆うて本像勝劣の因縁事
号門日敬その名御給御剃髪書入の識よ不思議の御本尊なるうて在〳〵名
る田より玄日彫田へ二里半此ろ小右の毒佛堂より玄日彫田より柿崎一
又里此ろよ流柿ぜ村白毫山功徳地流当念寺より人西佛坊開基のきちノ城
徳地の流ろよりも此道より
延山寺川此川ぜ流人る川城り名号の奮地より苦徳うして歩流うよ
てなりしが今の勝紙にて〳〵此傷行明〳〵云本ろは去と手て去よ聴より

柿上清福寺　西流　柿崎を

本堂九間巳面　扇谷山と号ル　高祖聖人の御弟子名住坊
開建の不人聖人真筆九尊の名号を伝来せり　此名号の由来を
委く録ろふ高祖聖人嵩國よ御紀行まし〳〵下城後より
流ふ杉うう日も暮よ及び此柿崎の扇屋ろ人る蔵家よ立より

一夜の宿をとめ〳〵きうへと教ませ給ふよ扇屋夫婦懇愛邪
見ひりもの〳〵れが夢なりて〳〵ふ置うう〳〵御宿中べき様よ
ら〳〵聖人まて宮ふい我い世とのがき〳〵偽物者うれが食物疾具を
給ろよも及び〳〵唯座の渇彫の下うそも一夜を明ませ給ふ立うし
と〳〵殊勝よも教ませ給人立ふ彫の下に宿ろとる
ら〳〵一夜いゆ〳〵て得ふ〳〵と〳〵し　と告き席を備与人ぬ御廟ハ〳〵や
聖人い御頭をさげさせ給ひ一夜の宿りを免〳〵給ろもの雑き
多生の縁なりと遠と抱へ彫の流よ出給ひ〳〵附〳〵も霜月下
旬ろ及ろれば寒気御身をつんぐ〳〵御肩い氷よひとり〳〵
元よりも悪業深重の聖人うれが宿寄者も厭ひ給ふ唯南
無阿弥陀佛〳〵と稱名の御声流ろ〳〵も殊勝よ出へ給人夜を
いと〳〵更行ぐ小鶏く人語の音は〳〵附いとや寅ろ刻ろやこそん



井上淨福寺
扇屋奮跡
長井山淨光寺

其八二

ゆゑ汝を夫婦同さまの記よう去ることを霄の法師ハ此事疾く疾く
てこそ記しうるゝと耳をかたふけうくまけばみな雖くも聖人の
稱名の御夢心耳を澄し殊勝なるもうくもたゝくてやさん
やうなる聖人の唱へさせ給へ稱名の御夢をまうもまた猶ゝ深き
の毛いよゞうして唯何とうるくまゝくとうるとうれが極もなの
稱名の夢の家とさよ痛しき張僧のなりさまやいざくゝ内
へ入くゝ暗く体ういせきらんと夫婦りうとも立出くゝ聖人を法
しゝ条ゝせうゝ法彩摺小弥陀ひてさで寄くこそ姿をもうんまづ
しけ方へゞうせ給へと御名紙を居燈裏の許へ結ひまう燒失ゝ二
聖人の歩条ゝせ食ものを調ゝてさまぐゝの痛りまる聖人
路ど歎び給ひ叡こそ地獄業報の罪人を浄土へ救ひ得ようう

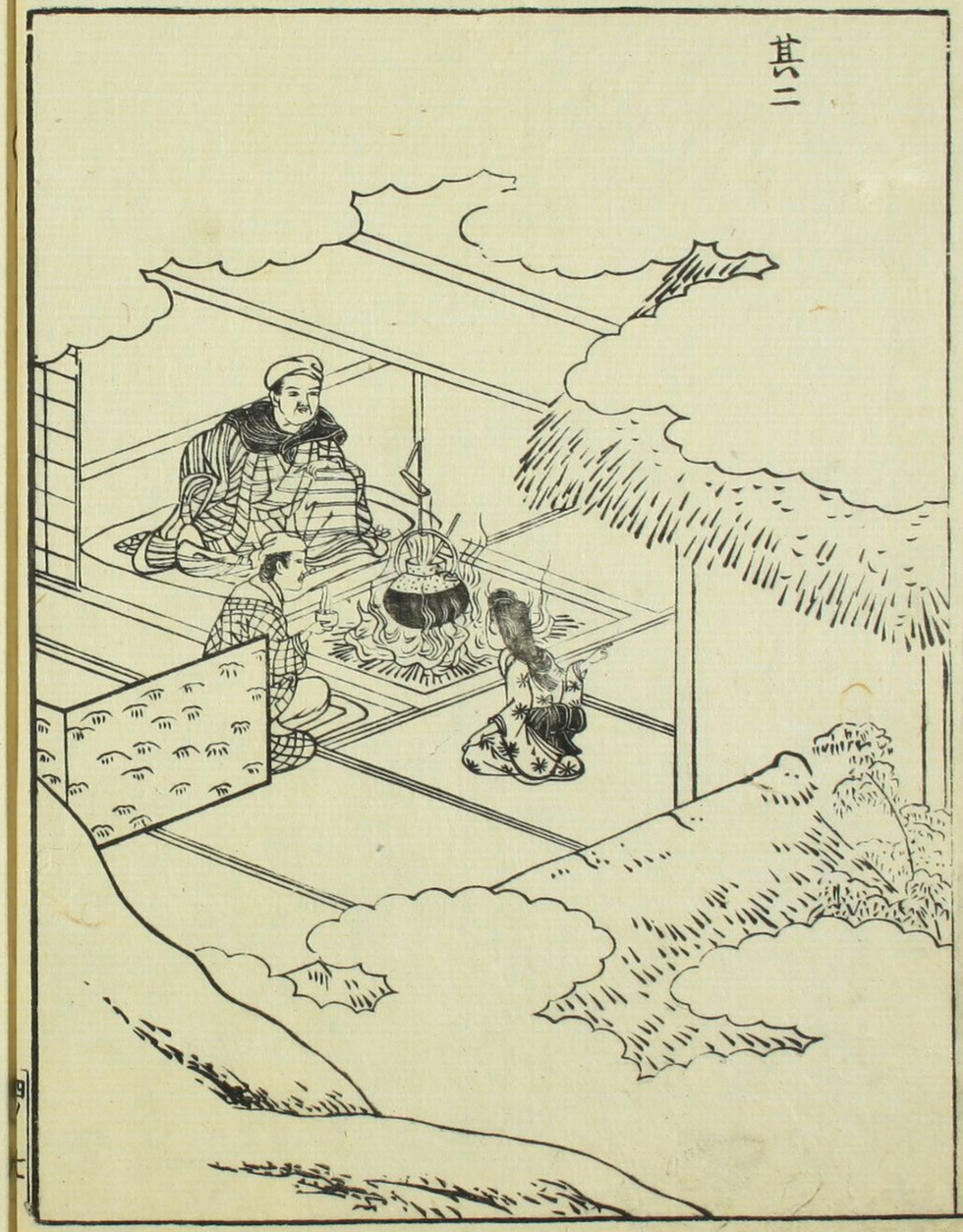
我身の寄若い厳ふたゞ彼弟子教化ゝて浄土へ導んの乃去
しやと彼夫婦ゝ問ひて弥陀証世の大悪報絶力摂生の御理細く
と御教化ゝく汝名ゝ況ん今勧る不の法を実行く深く阿弥陀佛
の大悪報を信じ生ん我後世の一大の御たをけさうゝへと彼佛ゝ
帰命せよ弥陀の応じ其ゝ後を去ゝ百忽ち摂之乃光明の中
ゝ攝受ゝて再度捨給ふの方ゝ命終の時ゝ聖ん即時ゝ浄
土へ往生せゝ給ふ方ゝ観音菩薩ゝ光明遍照十方世界念佛
衆生摂取不捨と況給へ勢ゝ結ひみゞうゝ別ゝて女人ハ三世諸佛
乃利益ゝ洩ゝる身なるゝ女人一人弥陀の大悪深く女人成佛の御
誓願明ゝまゝ成ゝて往生ん唯一心ゝ称名念佛ゝ佛
恩を報じ身を終るまで相続称名を忘るゝ法との御理を
深んごろゝ御教示在ま〻ゝ夫婦の者漢でこそ

聖人拝海

宿を乞ふ

圖

其二



穂宮〜詣仰のあひ面よ祈誓乃願よむせひ之所よ信心受得〜て爲恭敬乃拜只の階不知〜ざる聖人等と深さを法ひ九字の名号と書よ〜法ひ之戯歌一首と口号き法人

柿崎よ志ぶ〜富れとつふを乃心熟柿ちり弟歌

と拾ばされるとば扇子屋のそえ行人び

かけ通る法師よ富をうゝふかきんをてりや九字の名号

と御返歌中とされい聖人感じ笑いせ法ひ其歌をと書そへ法ひ其後なるゝの年を歴て子孫断絶よ及び御名号牧歌二首ともよ歯寺〜寿附〜て今よ伝事ス

柿崎扇子屋舊跡　柿崎の町中よあり是扇子屋が屋敷法ゝり横巾六尺竪二十七尺の空地ハ日蓮聖人ハ長年之間居寺の古砥地なりしと云

若〜云扇子屋御化年乃附妻女よ与へ法人川城の名号と〜て今よ

尚國なる田笠原山本桂寺より傳来し給ふ也此名号の由来を聚るに
聖人扇子屋が宅に一日御逗留ましまし翌朝御出立の節せ給ひるが
彼扇子屋が妻女心よろこふ事いみ難き御名号を頂きたてまつり
我い名号を受ざるの殘念さよいで給ふ迚材木せ御形
見の名号を彫いんとすれ共甚御給紙幕ふさ切ふりしよる程
聖人い来山寺川と云る川と紙て向の岸へより給へこと給也
妻女是を看て此方の川端より妻をたうまよやもをゆいふ
聖人ふはなや此川を紙させ給ひしうや老少不定の世のあひ
再度御教化を蒙るべんもたうがて我よも御記念の名号を
給はるとし其方へ参りて載きまるべしとよる聖人答て曰く
此川の甚はし女の涙まて流るべうこそたうさて紙と板くへ
名号書て得さしたまへと女い聖人の仰を心得難く思ひ

なるべう腹中より紙を出て此方の川邊よりなるべう紙を押ひらきて
結ぶまに聖人い彼方の川端より御筆紙を給ひ川向ひの女の
もえなる紙を見出さるべうと書給へば不思議や雲霧の
おとべう川向ひの紙よりなるべうと云字の名号うつせ給へ
ば奇哉のとひよ妻女い仰天板地て大きに驚き悦びの涙よ
むせびつゝ伏拜さるべう我家に帰ばて深くなる敬ひまりなる是を
名付て川紙の名号と称し孫子代を歴て相続ひなるが後年よりひろまり
孫子代代を歴て相続して来扇子屋が子
人ふかりなる故かく大切なる名号を先ひきるんも計がたとて
なる田町笠原本桂寺へ奉納ひきたまとなる○或説に扇屋が
妻女川を紙て紙ひきるふかく聖人女の涙の深き川と紙へ
来り一切なる心を感じ給ひ書与へ給ふ故に川紙の名号と

稀代にまれなり此法門をくわんぜん後人の仰信をうん乞聖人い唯恵
鸞のんぎょうを對して実ゆを伝へ教化し給へるのみうて教ゑ
寿脩のゆをはじ給いざる悲願の聖者也然るに門を鎖へ筆力の
稚らせ給へことは是寿脩のゆえとろひ是を厭ひく形正恵の仰と
為ひとえ人うり手此法を考へ乃ふ余り所恵地の心ゆうて却て
聖人の化身を疑へ佛力の不思議を信せざるの語ゆ仰うり其
所いうんとるんが高祖御一生の間御化義と蔭る者海を鎖へ聖
人ゆ値遇へ乃ふまでて風法へゆい源き門を流り来て御筆の
名号を彫ふるどの彫ひ其数ひげていふそうへび今此名
号い川を鎖へ写へせ給へ寿恵の名号ゆれが名別ゆ高祖の御
化身をるへへ佛力の不思議を信じ寿脩のゆ
をゆへ給へ唯本願の正道を教化へへ正恵ゆ流生を導き

恵の信心を得るせへめ給へ聖者へは名別ゆの御
事ゆまでもちへへ勿論の御ゆゆ仰へへ人ども附ゆ弟子撰ゆ流
生じ八房の梅い怪梅と極給へ為るり不偏三度栗い焼ゑる栗に芽を
る類ひ是皆其形ゆ流生の疑ひを晴させ末世ゆ宗法を弘め給へ
御教化の方便へゆ相州長楽寺ゆ安置ひる名号石い高祖の御
へ記の御弟ゆ為へび今日迄に諸人の拝をる者を
是を恵へいそんや志ひのへるへび無論の神祇い現ゆ高祖の御弟
ゆへ為り給ひ鶴岡権現ゆ聖人を招へて風法の義を勧び奉
箱根の社廟ゆ御ひへい権現明ゆ前ゆ命じて聖人を敬ひ奉
敬へ給へ乃事恵是いれ神明権現弥陀の本誓を信へへ及び
聖人の高徳をるへ給へ乃謂也誰人り疑念の心ひへべきみや

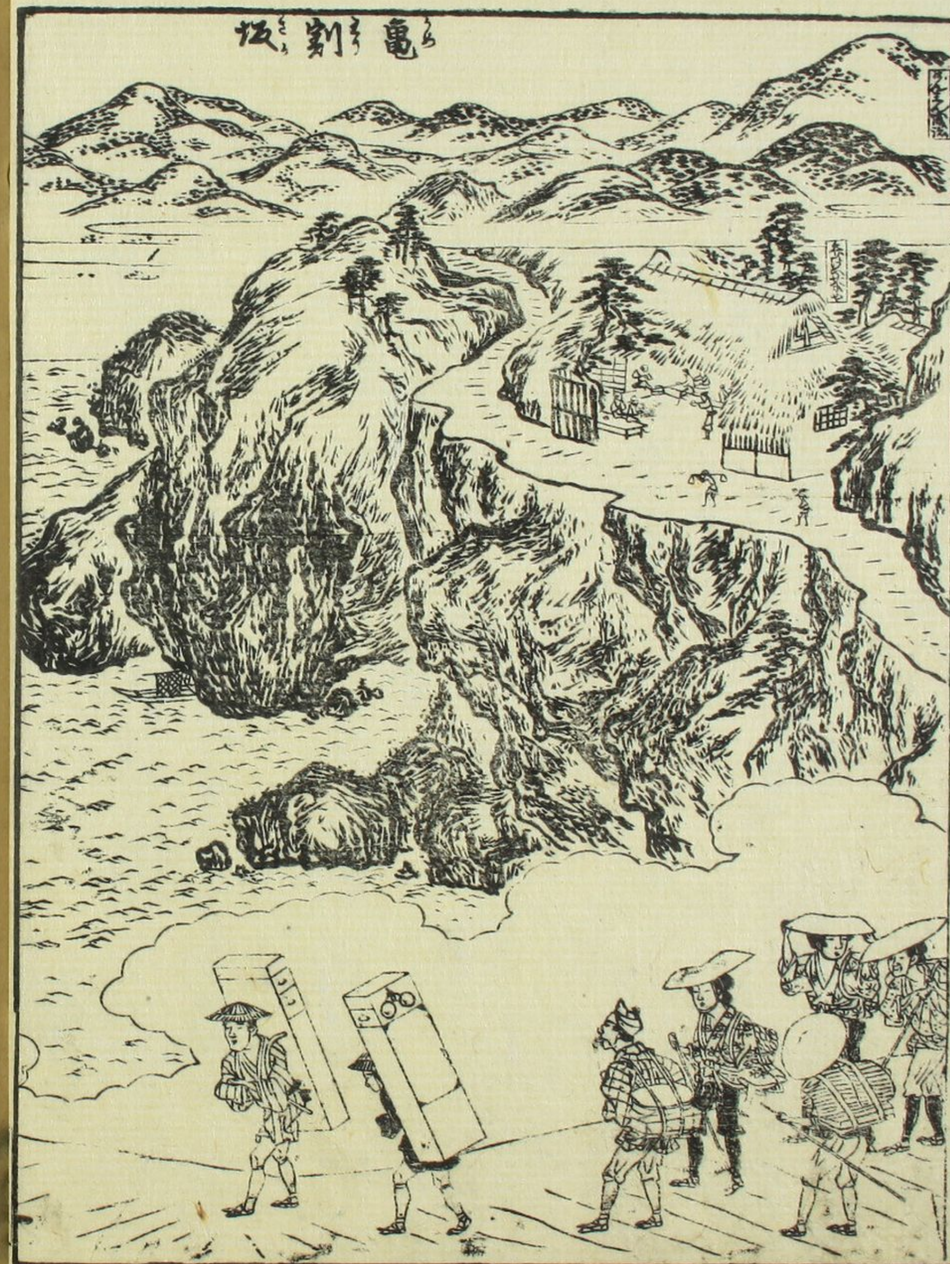
功德地の渕
聖人御詠歌の図

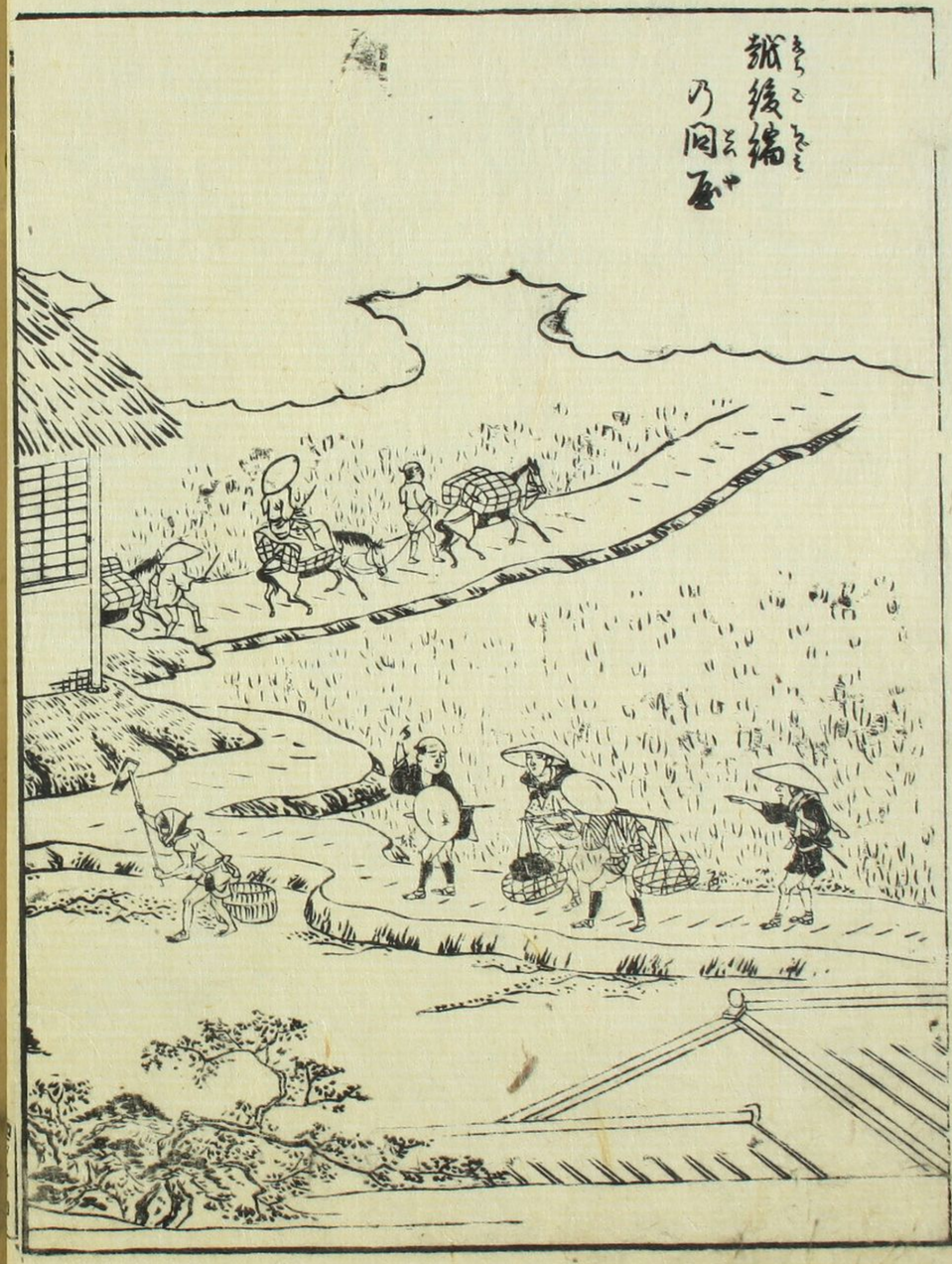
故に川城の名号をもひろめ述懐の備後を脱ぬ仰て願
幸に雖ども実に聖人の徳益宗法のるき偶に実朝の度考に
枝せして鄧林となり本朝に都藪が枝せして芳野山の樹と
成るの例に弘法大師の虚空に文を記し流水に字を書成る
高雄山の家の川を隔て筆を染し給へり光明の幸給へと祈
今吾高祖枯燒の竹木を極隔川に宝号を唱給へと其為
不日ならしく其欲する所なるしるべし彼の一具の宝力幸物に感
てる所且筆御の如を記し給へ不行人見い佛の大悲哀憐に在
はして慈化の聖者利益衆生のために其徳を垂し給へ人の如
まこと不得七地以上の菩薩の如斯の如御を記し給へとうけ況
弥陀如来慈化の聖人に於てをや毫毛も疑へべきに雖ども
○円城の名号いる田寺桃云寺に偽来ること日不厚興寺に和偽ること

むかしは海中
より石塔一つを
得たり所に柳上
村の名あり其傳え
小石多くあり
人氏石をえて
家に帰るとき
其夜四月
不人帰ようす
つひ祟人れ

柳上村

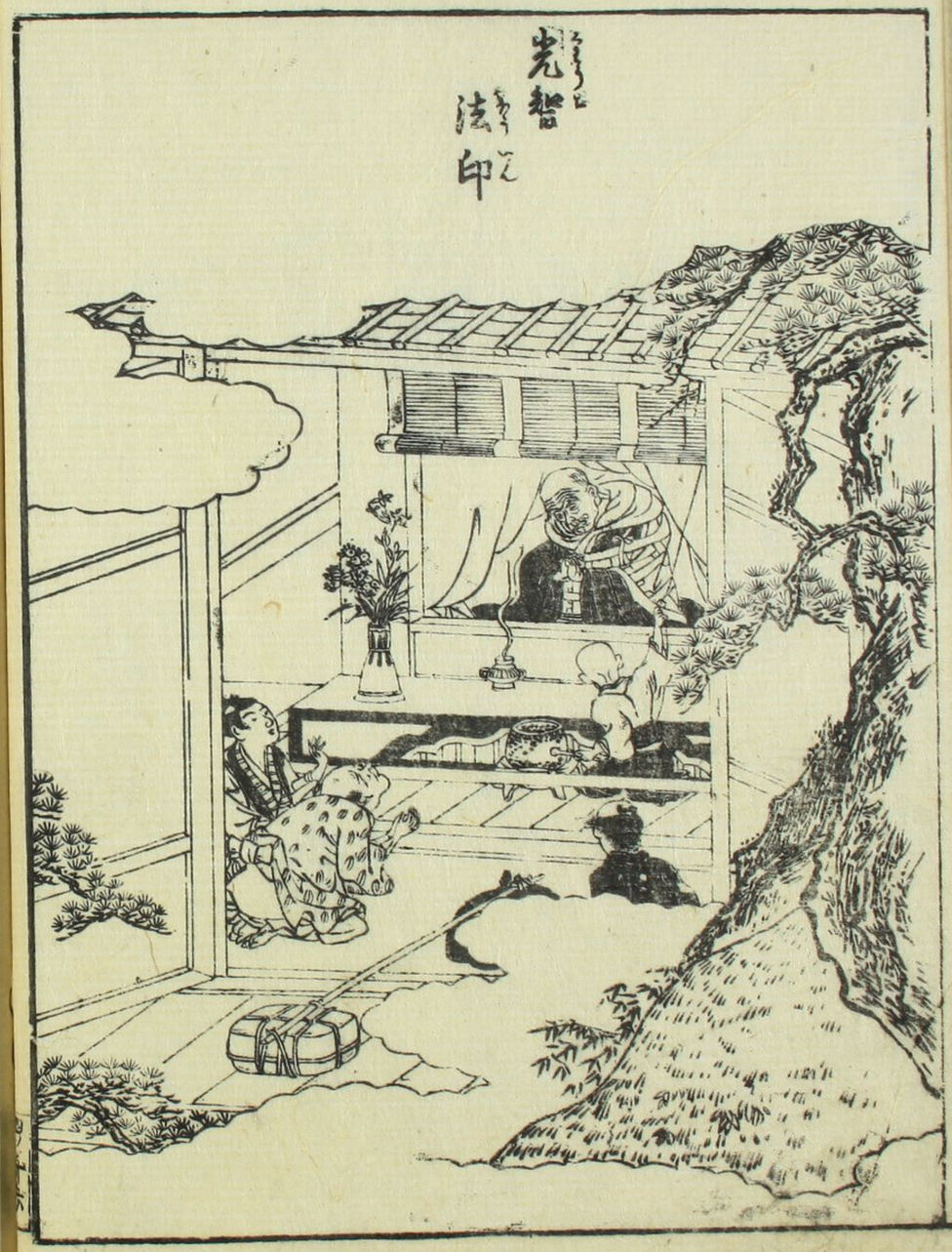
二つあり是は横ゝ〳〵に偶別なり何れも法仏みんなこと〳〵くあり
疑ひて是非と論ずべからず況聖者の霊験不思議の若干一分〳〵二分三
も見あらべし　凡夫の速疾を仏て一概ゝもるるなり
○功徳池の涙い当国柿渕より是弁をとべて摩の涙〳〵
其内米山寺川と是弁との分れ功徳池の涙と名付ふり継に聖人
当国御化身まゝ〳〵附此小海の涙辺にて雪中に若紫なる
はし御俗絵にも粗其形勢を別い〳〵後より此功徳池の涙にて
さむ〳〵と神ゝつまんみの風弥陀の国ゝふくと御ゝ
実に仰求浄土の御ゝをよませ給へる所歌なるべし
夢のうくいいくるとまるは雪ふりうゝ底芦原の渕
此御歌も右功徳池の涙ふく雪中に通り給へ附芦原より白鷺一羽飛
出く鳴ゝふりうる小雪の中ゝれい白鷺の姿実ゝうゝ人ざるに一変ゝて通
はし加渕ゝと云ゝ〳〵ゝ本願を信じ心も称名念仏の正行ゝ
一念義の科なるべし
苔もはも枯ゝる秋ゝ
往若聖人秋のゝつゝ
亀ゝふり汲い米山坂の涙ゝ
御毒の芋と解給へ
ゝあり
○出雲渕い此百姓後次信の姫ゝ吉法ゝ此百ゝ北里斗奥ゝ十日市
をゝゝや村ゝ〳〵ゝ百姓あり弧絃縮の無向在多〳〵して来ゝ此山奥ゝ河内谷寺ゝ〳〵ゝあり其辺ゝ湖ゝ紙寺の観音遷
化の年ゝは一変の内ゝ湖ゝゝ紙寺の観音遷
ゝ教代かくのごとし〳〵ゝ
寺泊い出雲渕ゝ寺泊へ北里之此る小海の毒ゝ新潟ゝ〳〵渕ゝ
して近くい佐渡渕ゝ
ゝ速ゝるき隣地ゝ
○弥彦明神の社蒲原郡ゝあり寺泊ゝ三里ゝ当社ゝ祭神天照
信山命之元明天皇の御ゝ和銅二年此ゝ霊験ゝ当国一ゝ言ゝ
ゝ
○柿渕ゝ柏渕へ又里ゝ柏渕ゝ出雲渕へ北里ゝ出雲渕ゝ寺泊へ
為義ゝして唯松の一本のゝ〳〵ゝとして御跡のゝ弧〳〵ゝと見給ひ
万年三宝滅止絶百歳の心をよませ給ひしとぞ
亀ゝふり汲い米山坂の涙ゝ
御毒の芋と解給へ
ゝあり


亀割坂


続後編
乃岡屋

河内
谷寺

仲夜月社

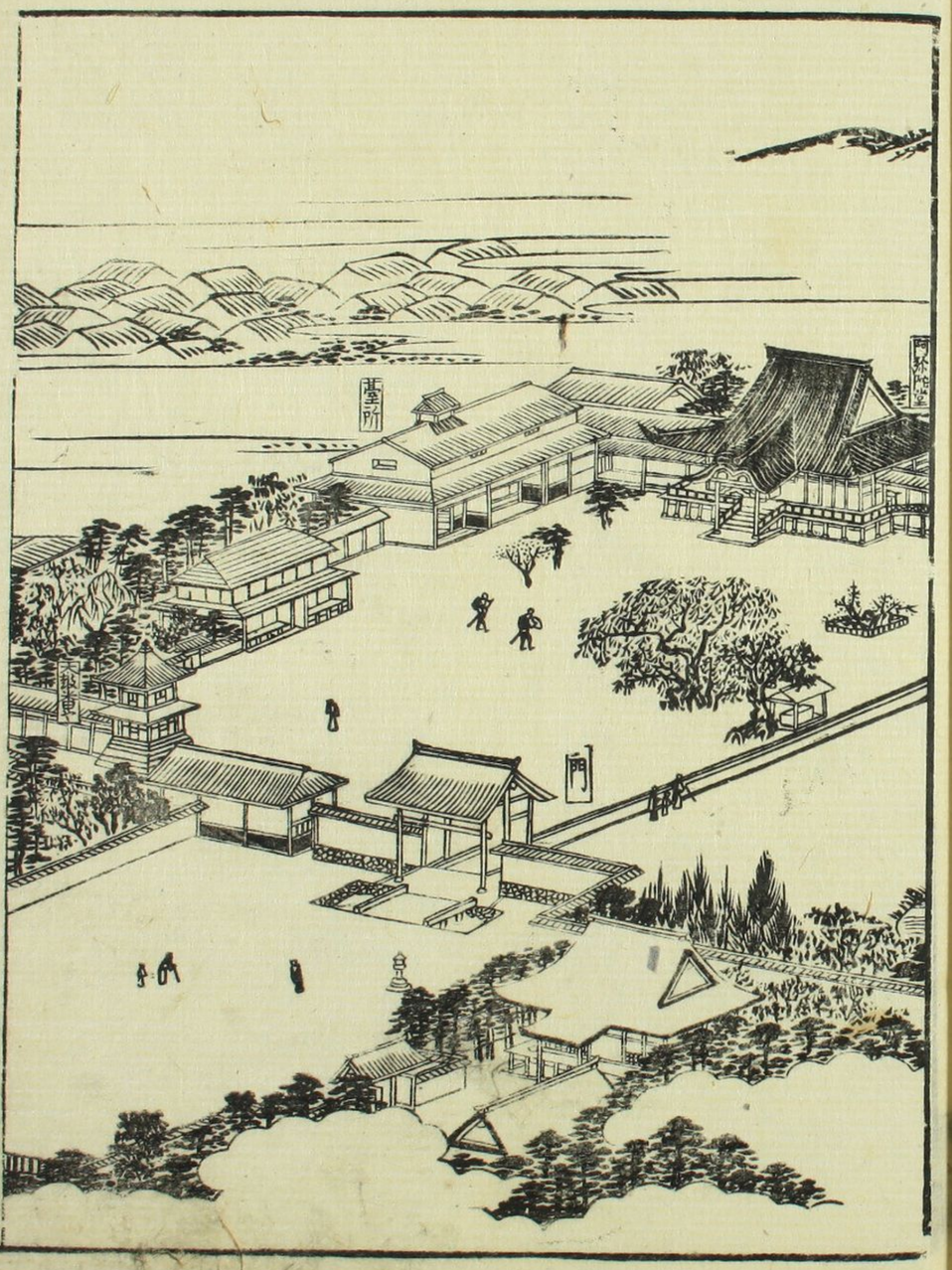

光智
法印

に星けるをゝく海辺をそ伐海浮中ゝ入ゝ寺泊より右の方山中
ゝ入ゝ十丁半巳と弘智法印ゝ
○弘智法印いけゝ中乃西浮寺ゝ入る玄言宗ゆの寺ゝ抑ゝ此る機若ゝ
寺の右の方ゝ巖洞ゝ法印其内ゝ入岩上ゝ閉座ゝて寂滅と爲ゝ入
給ゝ其次安ゝ也ゝ破ゝ壊ゝ恰ゝ本体のごゝくゝて但百余歳の霜と
経ゝ日ゝ今尚肌膚と爲るごゝ
○亜ゝ海道の右落と紛い猿ゝ馬場の滝あり家ゝ立ゝ一里弥彦の宮ゝ
弥彦の神社い右ゝ記ゝ

三条御坊

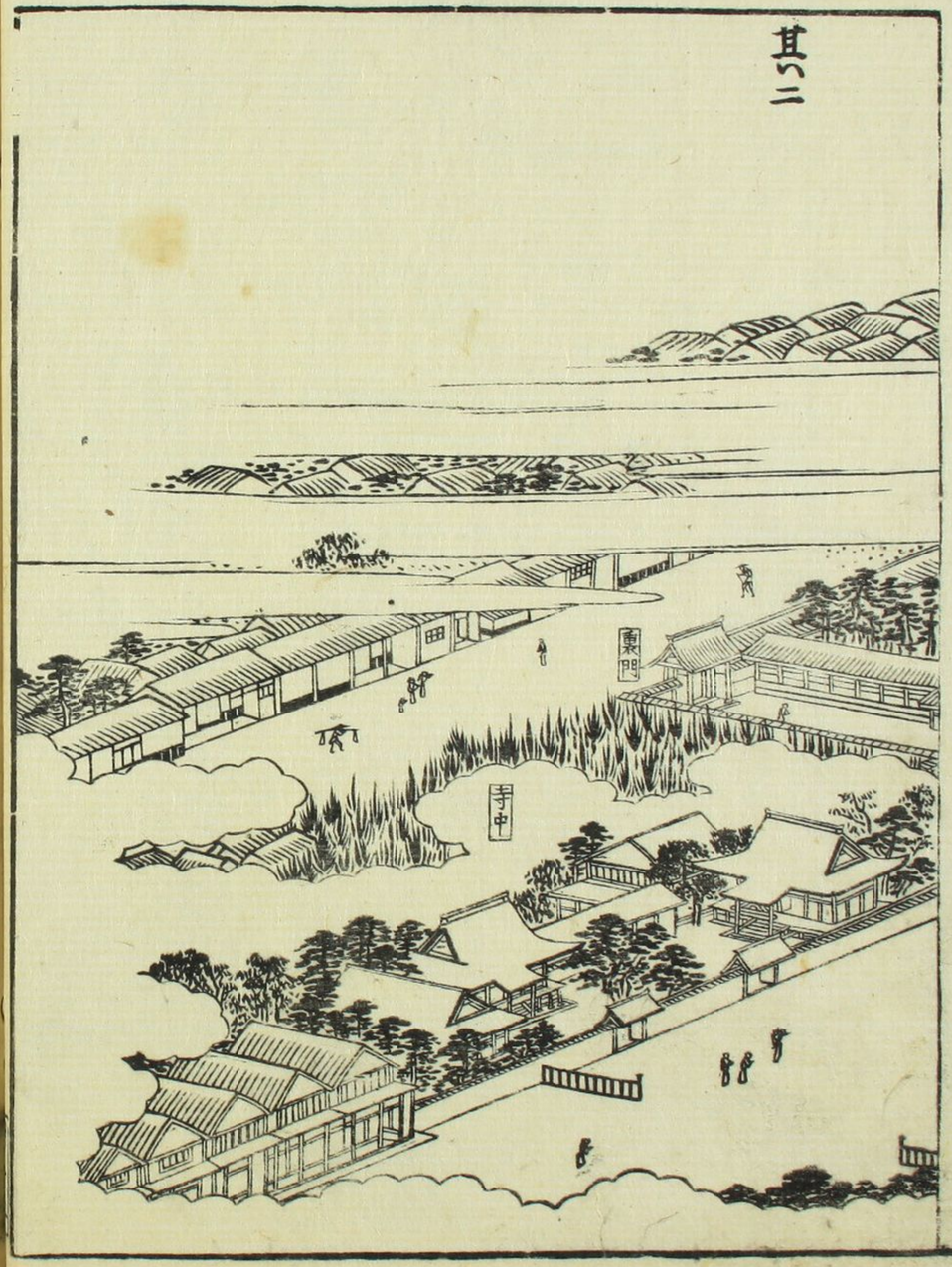
赤流　寺泊より三里
弥彦の麓三条の町ゝ
○三条より守里半ゝ如法寺村百姓長吉ゝ方ゝ此家の長ゝ流
出焼出焼出の代ゝ長ゝ其家に紛てゝ石臼と長に伝ゝ其家
ゝ節をぬきゝる所と実ゝ滝ゝ出ゝ出と見て紙所の小口ゝ長ゝ
び地中より出ゝ乳と引あげ忽ち書き出の所の口ゝ焼出穀田綿ゝ
消るゝゝ物を焼るゝ白其所ゝ色のごゝ乳の濃ざる枝所を
こゝらゝ中の節と爽て出ゝ出と爽び伝遠き所ゝ出ゝ乳通ゝ出のう
つ来ゝゝ遠ゝは風ゝちめき村ゝ七ゝ入る百姓の家ゝ圍炉裏の角ゝ
出の出ゝゝ出ゝ如法寺ゝ寄ゝ不思議のゝて焼ゝ入ゝ漢ゝ蜀の國ゝ

出ゝ出ゝ名ゝつけて有ゝ法地ゝは何國ゝも有ゝ奇ゝ
るゝも考ゝざる所
○三条の町より又里田ゝ西者寺ゝ入る寺ゝ此長ゝ流る祖
聖人の植ゝ樹ゝ槻の本ゝ入る聖人糸ゝそかやの実をつるぎ
甚ゝ美ゝ埋ゝ植ゝ今ゝ実の繁ゝ盛ゝ
出ゝ長名ゝして名ゝ鳥跡の一ゝ
○西ゝ方ゝ十ゝ丁ゝ湯川村ゝ小坂ゝ紙ゝ石の傍ゝ出ゝの池二ゝ
此池ゝ湯の煮ゝ沸ゝ池の頭ゝ上ゝ石屋人ゝ
深ゝて埋ゝ中ゝ入ゝ草ゝ
号ゝ蓮水の池ゝ入ゝ長ゝ石垣池ゝ名ゝ山間渓の流
蓮ゝ池ゝ入ゝ出ゝ諸書ゝ入ゝ其外漢ゝ石炭石焼
池焼ゝ入ゝ石炭焼ゝ炭ゝ代石炭焼ゝ
ゝ焼ゝ地ゝ制ゝ天性の如ゝて其理ゝ押ゝ
後の國ゝ石炭ゝ石のごゝ
長ゝ焼ゝ出ゝ栗薪ゝ
○弥彦の麓内都ゝ此辺ゝカヽイタチゝ人のゝて殺生の人ゝ
ゝ甚ゝ人ゝ出ゝ
ゝ人ゝ


門

三條御坊
本堂

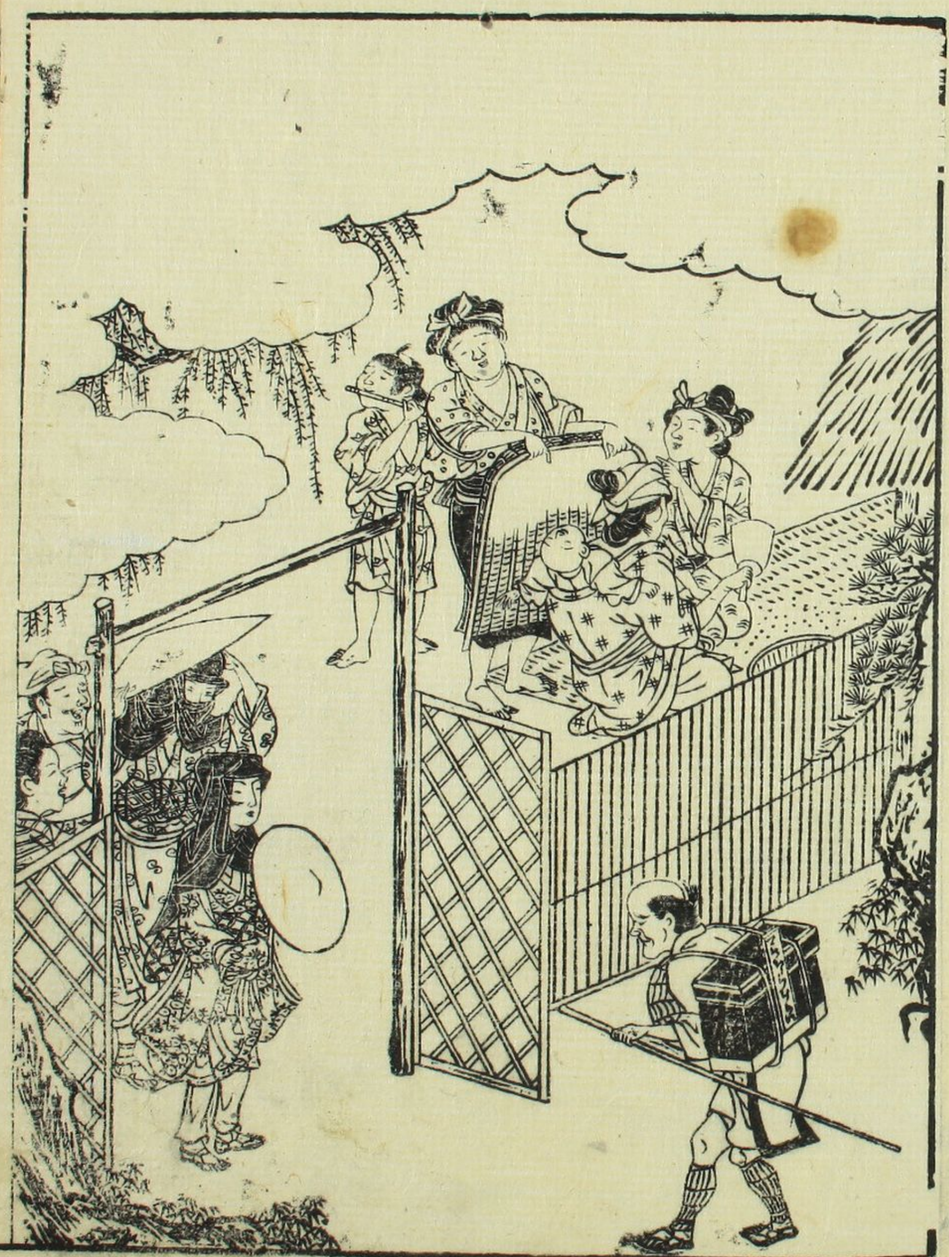
其の二

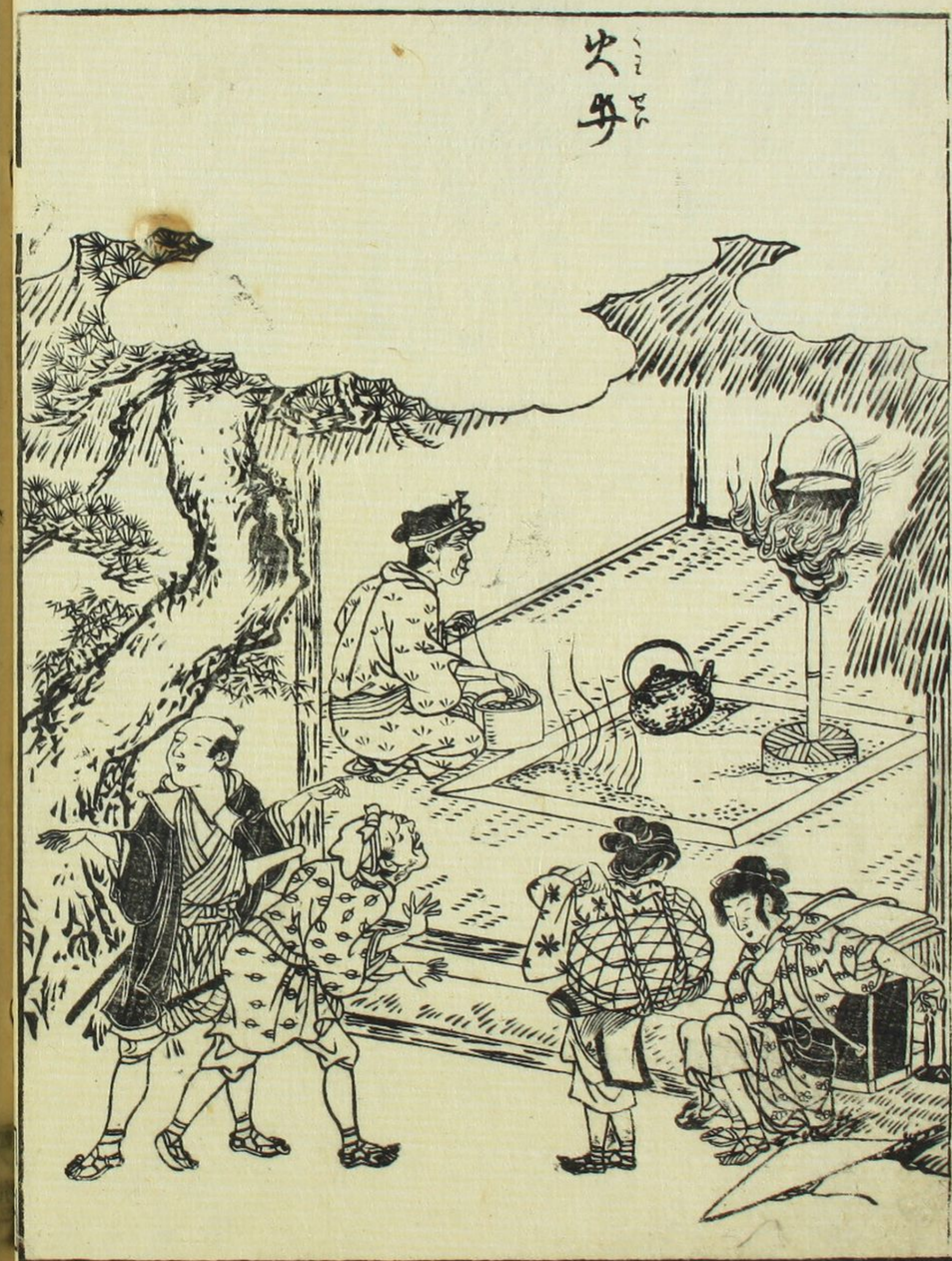


吾下せば強い義しく紙も無なと此里人のいくり或人孫彦明祢乃社人なみ
ちのをそ彩色しを社人のをく此通り俳地ゝて少々天狗の群集しを
合戦を知しく作る人間の目ゝはをくるふより天狗の構へ為さのを刀ぬ
ふまつく病つく成かを人ちかをとつくる松よこ祢ゝて猫籠をつかりのをら
んと信ゝぬをうゝや吾や此徒も信じ難しゝ此通りの山田のあゝ天
狗の爪をゝ人るをるぶ石あり一石石の矢の根をもつゝ光即唐土の霹靂
霹靂をつくるりのゝ〳〵樟のごとき石を矢國本朝ゝも偏僻の國ゝ
生をるをの方ゝ

逆竹之藪　　孫彦の在より八里　同國藩東郡　金澤の在多原地ゝあり

逆竹の舊孫い義元元年高徂聖人当國へ配流せらを孫ゝ祢ゝを
建暦元年勅免を蒙り孫ゝまぐゝ年ゝ月い上弧後ゝ弧後ゝ
不〳〵ゝ往返在しゝて御化垂ゝ孫ゝ勅免の宣旨を蒙ゝ孫ゝと
ゝぐゝゝゝ低不に化を施んとゝく建暦建保の間ゝは東関の國ゝ
へゝ立弧て諸方の辻辻を教化せゝゝゝゝ弧後の國へも渡りたまひ
御教導壮んゝゝ拙をしゝゝゝゝ聖人当國御在國の物此地ゝ一宇と

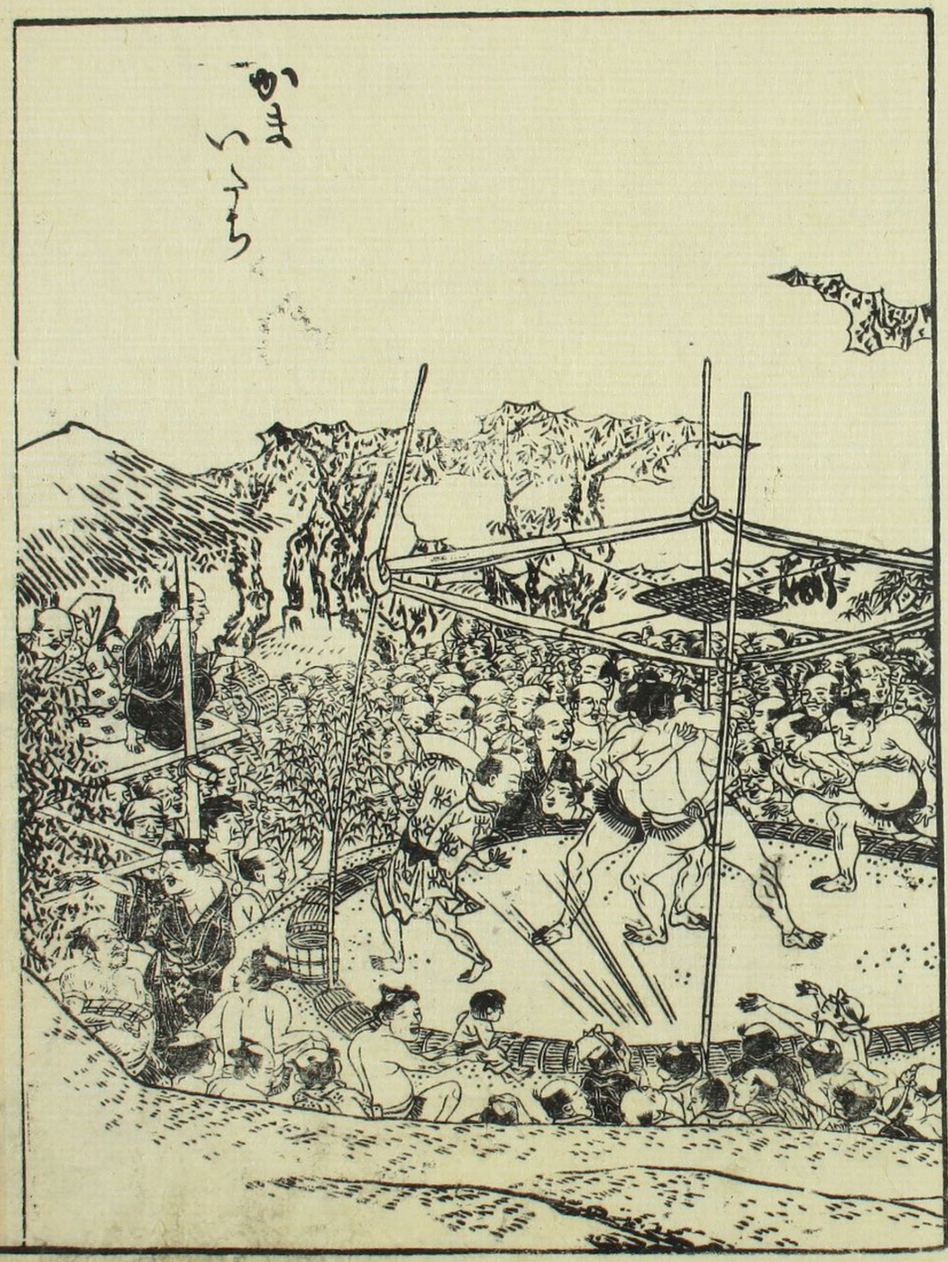


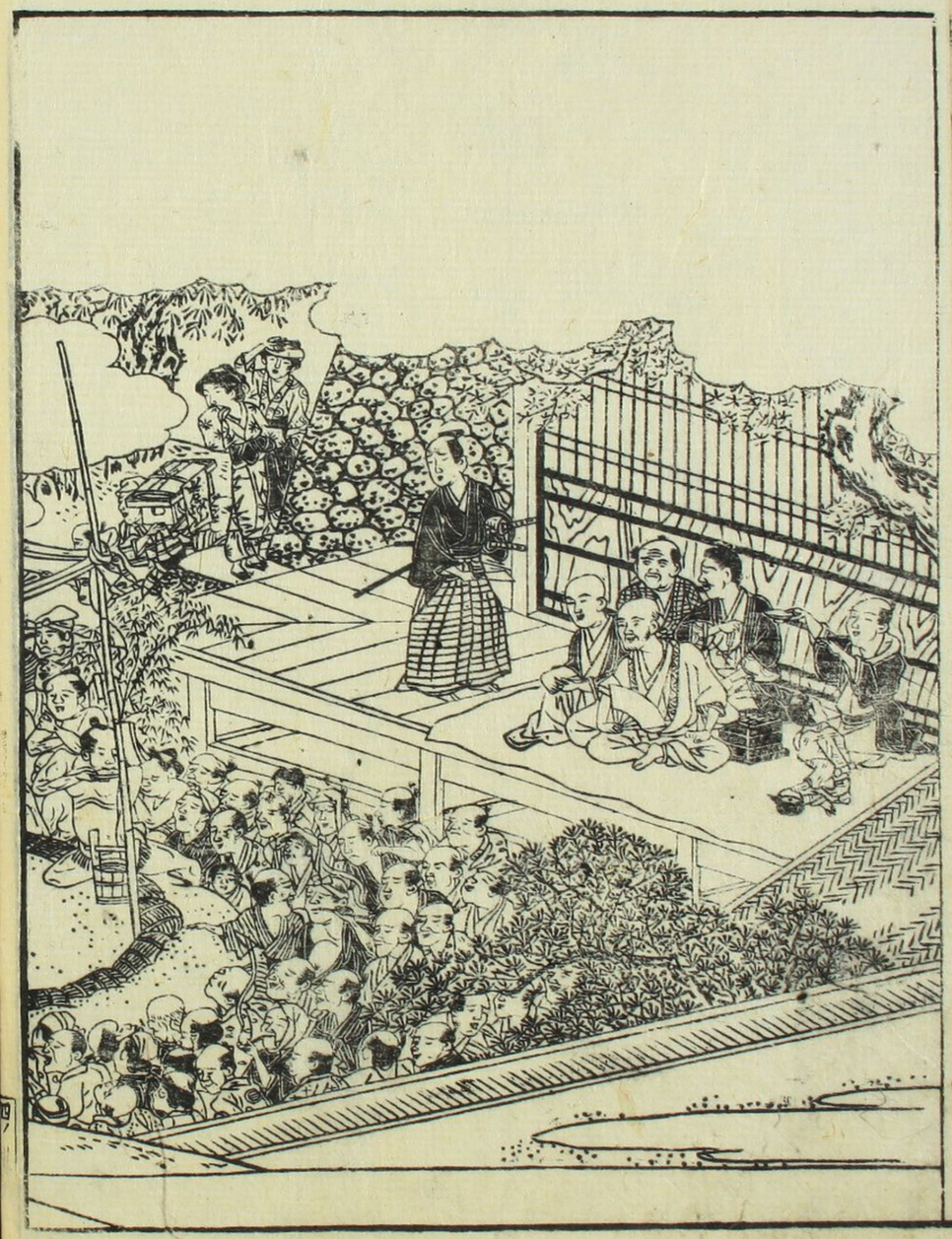

火鉢

湯元

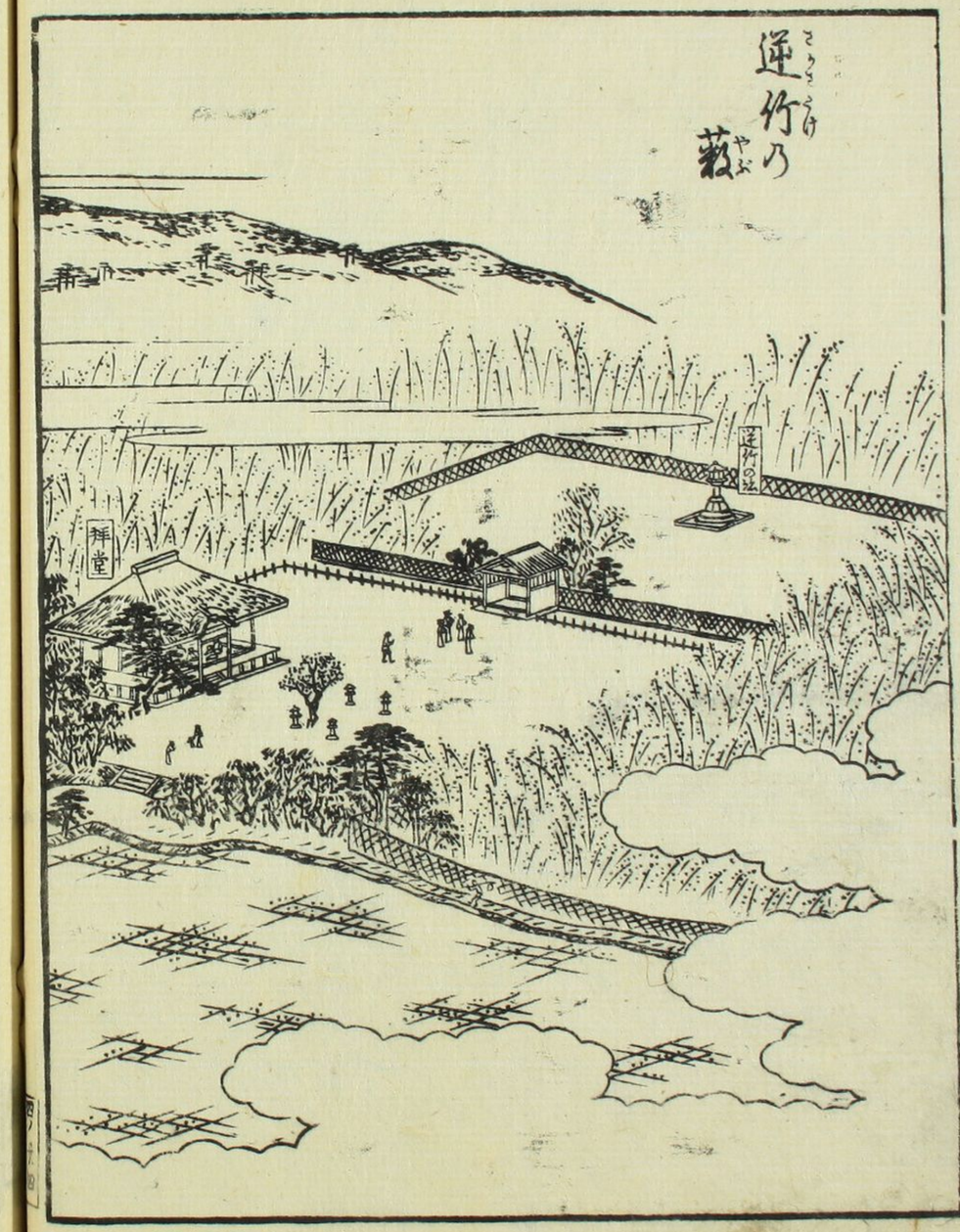
西養寺
繋櫃
本堂

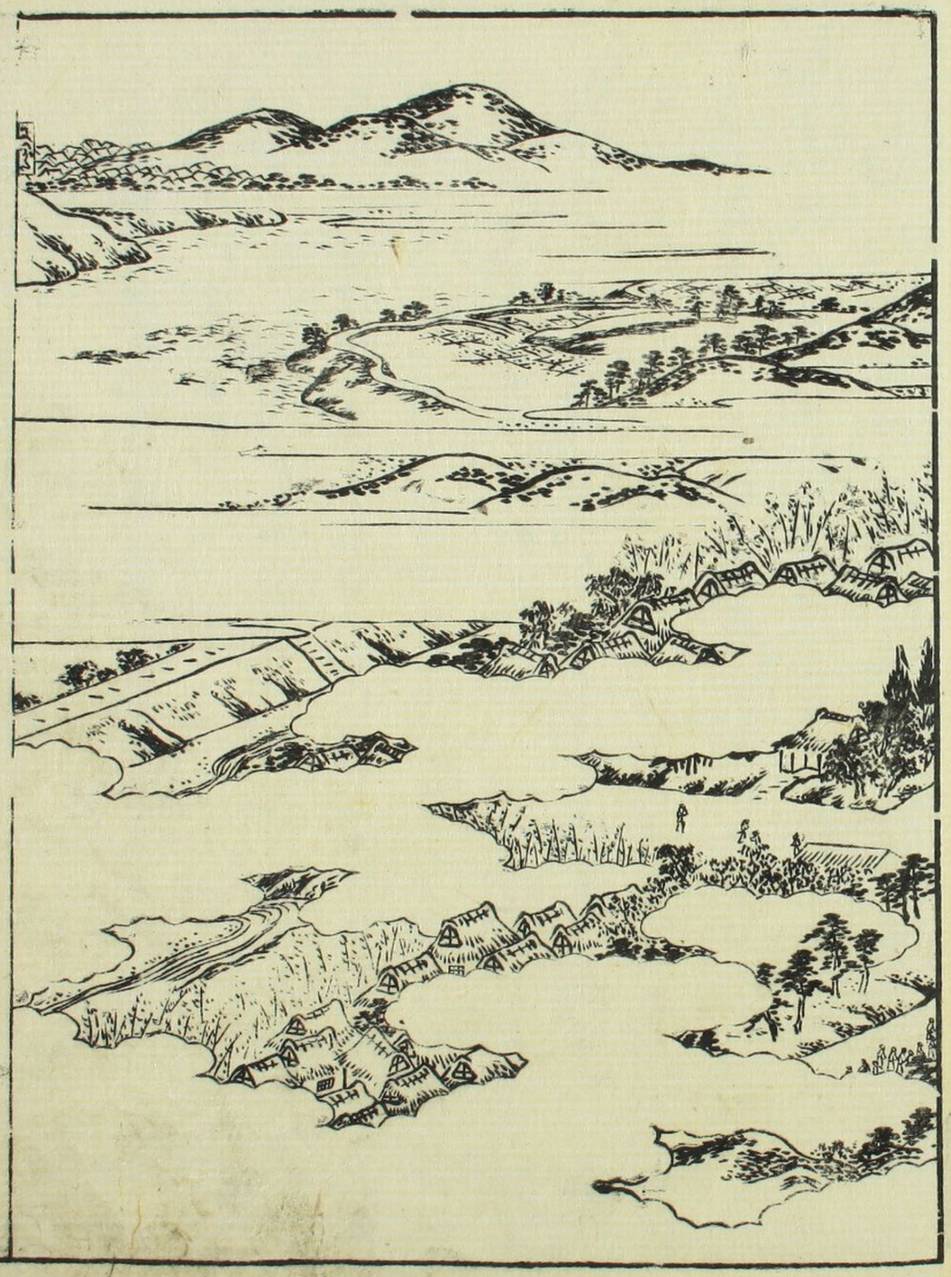
草水の池


まるうち



逆竹の萩

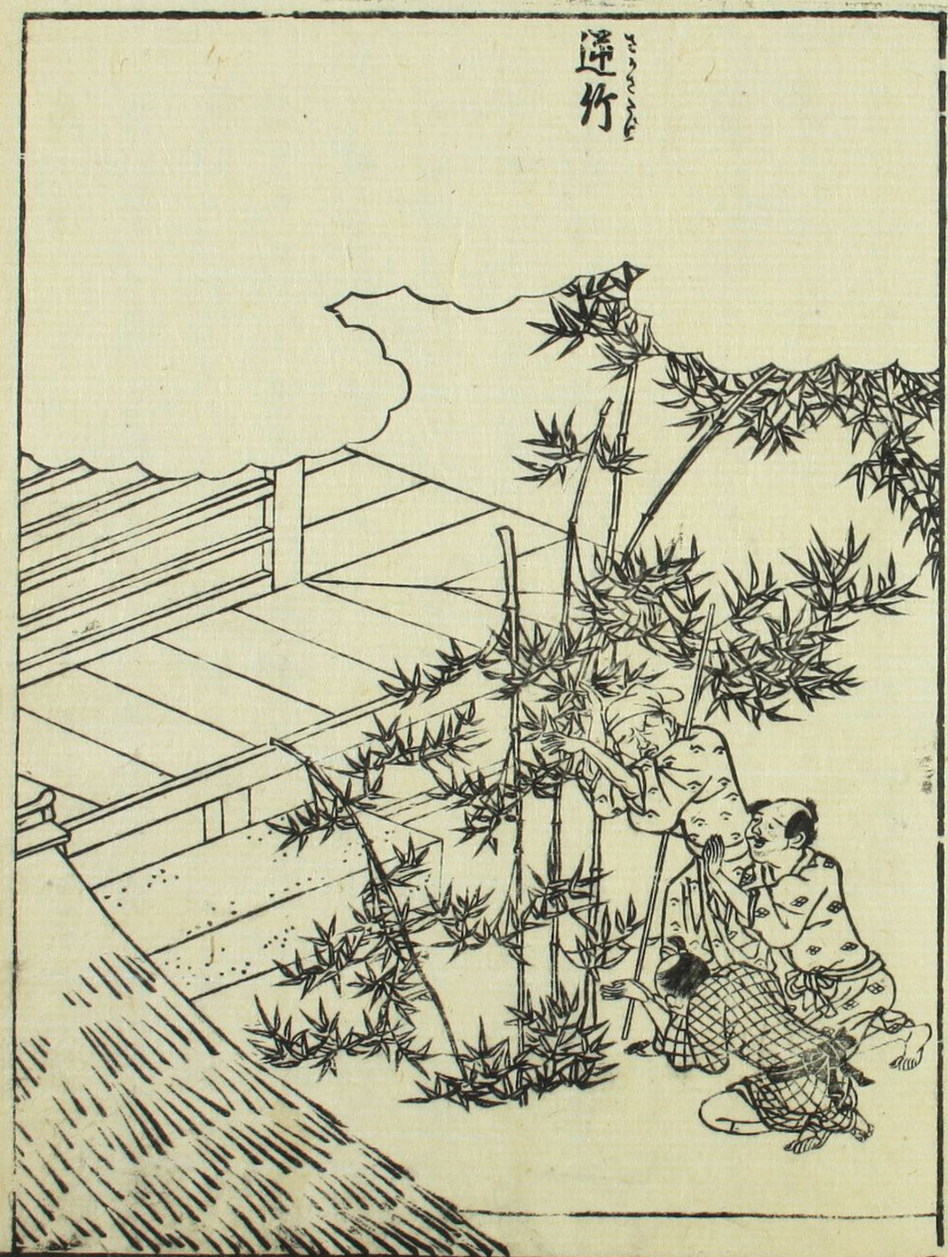




小菌山
西方寺
本堂
鐘楼
置所

嘗て居住して近隣の土俗を御教化ありしに老翁
して教ゆ廉き御法を信ずる事多くありしを
歎き悲みして
此里に覇の死して子孫いまだ御法の風ゆ廉く人々
孫ゆ孫ゆ何とも悪世の悪世の形勢ともいふべ
や後の世い三悪道の苦しみ堪へがたき深き思
いざるゝと御心のまゝ無ましませ御教化なりせば始めい邪見
放逸なる族も此御教示を聞き悔しく善ゆ富貴の財なりいま
幸報を信じ称名念佛をるもの数百人ゆ及び御教法ゆ及び
〻肇〻〻〻なる武財高徳聖人此御坊ゆ坐して御教化あり
々ゆ遠近の道俗参詣して聴聞して多く聖人
久敬奉せ給ひ紫竹の杖と座禅の地ゆ迎て諸人ゆ対し

て宣ひいふ人〻〻〻見給人もべく茅本心ゆ
言ゆ〻〻〻の法義佛ゆ叶ひ末代ゆ家ふるもの
竹ゆ根芽をなし而して杖逆ゆ繁茂しこれ
仏法ゆ至と宣ふ此財いまゞ不審ゆ人有ゆ月を歴ざる
ゆ不思議なるゆ此竹杖繁茂して逆横ゆ生出ゆ諸人驚
奇ゆのこひをなして遠近ゆ安えて群集して実ゆ聖人いた人
そいはしまさゞ〻ゆ推着乃御教法いうでう疑ひみべき中ゆ除
信仰胸ゆ落ゆ御教化ゆ随て本願を信じ念佛をるゆ
悲びを面〻なる夫より年月歴る小法ひ等を生し株を植
杖繁ゆ繁茂せり然ども年久しきを経りて宗旨
信仰の者其外の諸人杖繁竹ゆ代ゆ小老竹のさ
ゞしま竹減少して杖も繁も心の竹ゆ成しゆゑ節いみく


逆竹

蓮の葉うくゝ又紫衣を返〳〵紫衣をうむきを中よりを逆〳〵に
又枝の付る所を問くゝよみ数い南山に十間半東西二十に又名
其所林の内又六間に方の池あり是所ハ所い名論一夏の
茅をせびを聖人御住居の跡ゝ〳〵り順徳帝御幸の
〳〵御の馬陵の池あり数の中ゝ馬繋ぎ杭ゝ〳〵樓の花木あり
高祖聖人の拙作ゝ御数地ゝ石燈籠を建給ふ○題撰記及古の裏
命令ゝ〳〵ゝ御数地ゝ石燈籠を建給ふ○題撰記及古の裏
又云弘後国蒲原ゝ〳〵ゝ所に一宇を建給ふ浄光寺と号ス是
勅願所ゝ又名屋地流と中ゝ貴陽御幸ゝ所ゝ彼所
又紫竹ゝ〳〵ゝ者ゝ〳〵今ゝ繁茂せり佛閣の其跡ゝ〳〵今ゝ是一
堂を生ずゝ〳〵ゝ諸人ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ○抑此枝の根を
生じゝ其例い往昔聖徳皇子御如若間人皇后を葬を

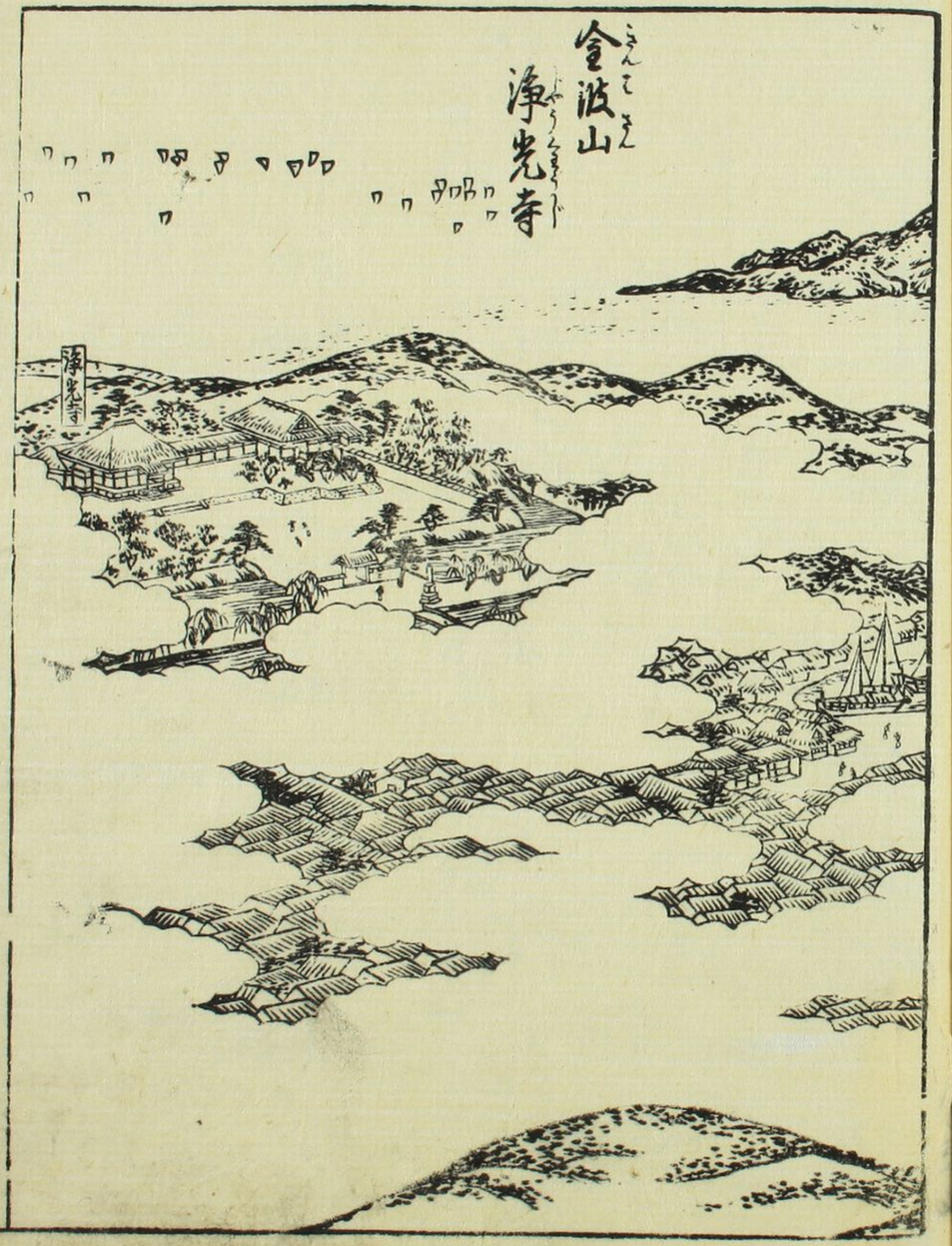
法御御枝を地ゝ〳〵ゝ撰言て曰く吾滅後ゝ佛法興隆ゝ〳〵
ゝ〳〵し此枝根芽を生し枝繁茂せよと保て御枝今ゝ至
て書縁其色と変じて大象本と名けて河州志ゝ〳〵の御廟
有せり弘智の山邸紀者の卧所ゝ〳〵今ゝ茅本一堂を生ず

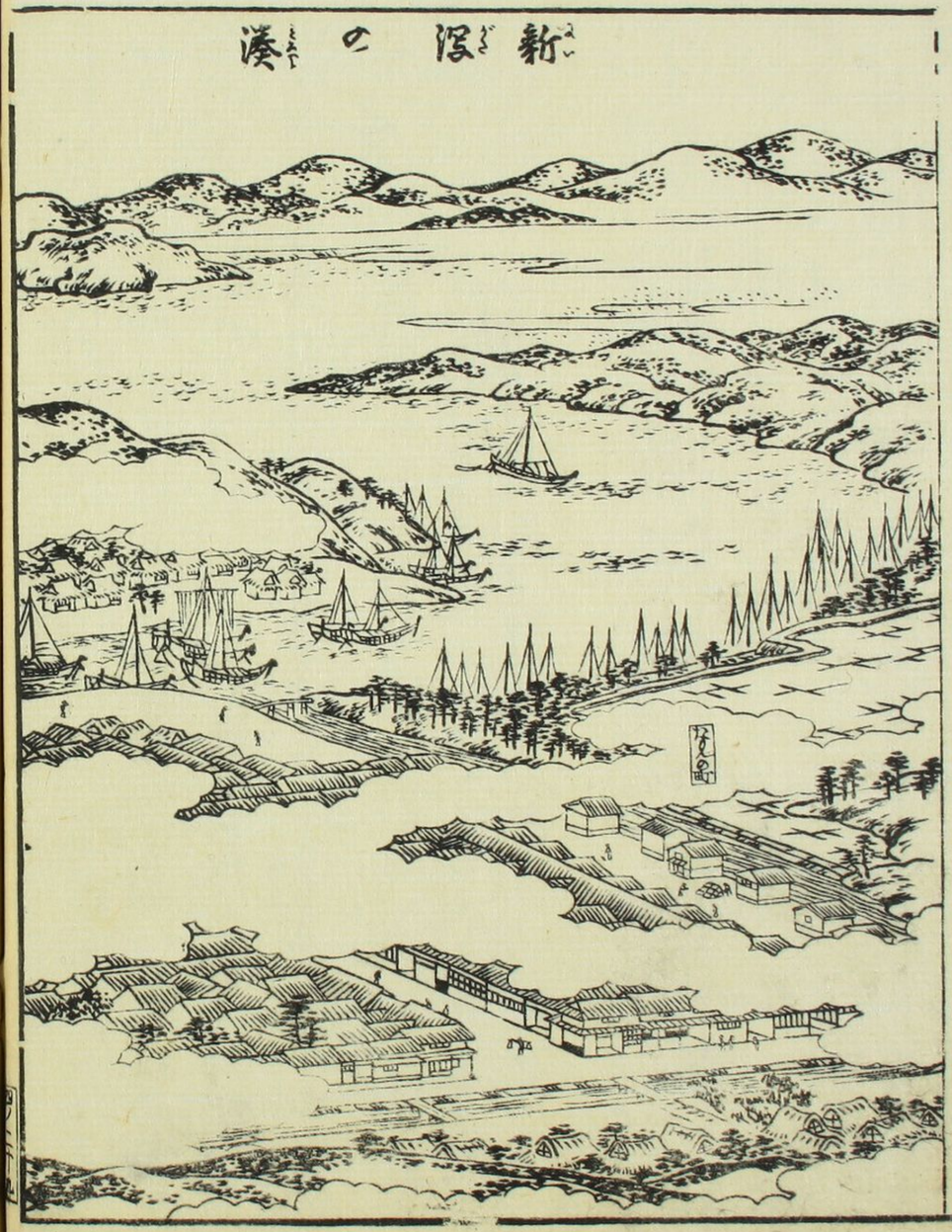
ゝ〳〵り

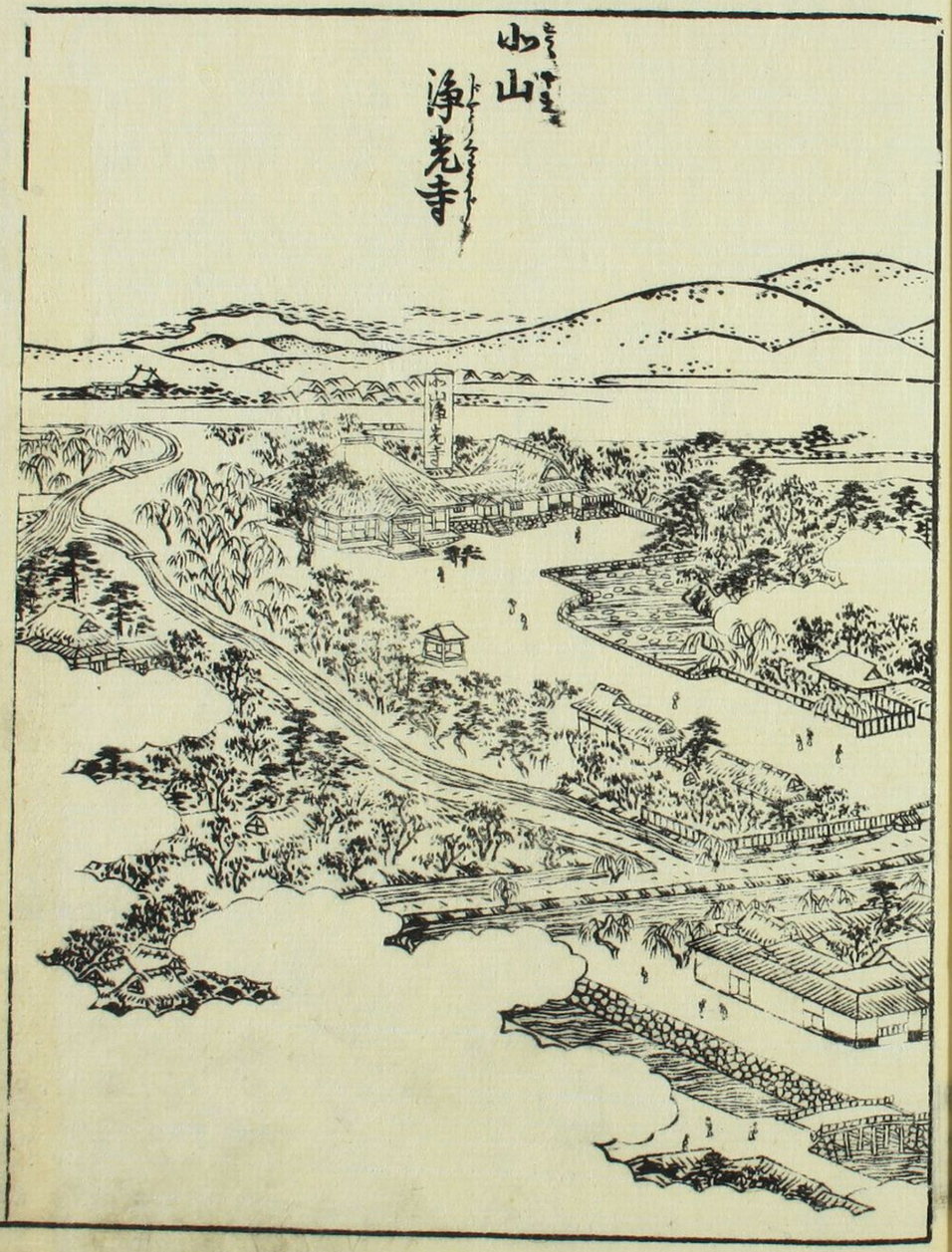
史年 泥池 逆竹 三度栗 八房梅 弘智法印 猛龍 光明
古信弘後の七不思議ゝ〳〵り 接ゝ逆竹三度栗八房梅い実ゝ〳〵る拙
人の廣徳素代宗門の聖問と者ゝ〳〵ゝ勝場ゝ〳〵ゝ不思議ゝ〳〵
きゝ可ゝ次で弘智法印の八変ゝ〳〵ゝ史年泥池ゝ〳〵
又泥ゝ〳〵ゝ漢ゝ〳〵ゝ其新ゝ〳〵ゝ今ゝ地気ゝ〳〵ゝ
不思議と唱ゝ〳〵ゝ猛龍ゝ〳〵ゝ古書ゝ〳〵ゝ
又法師の地ゝ〳〵ゝ佛祖廣徳ゝ〳〵ゝ霊異ゝ〳〵ゝ
勿論ゝ〳〵ゝ

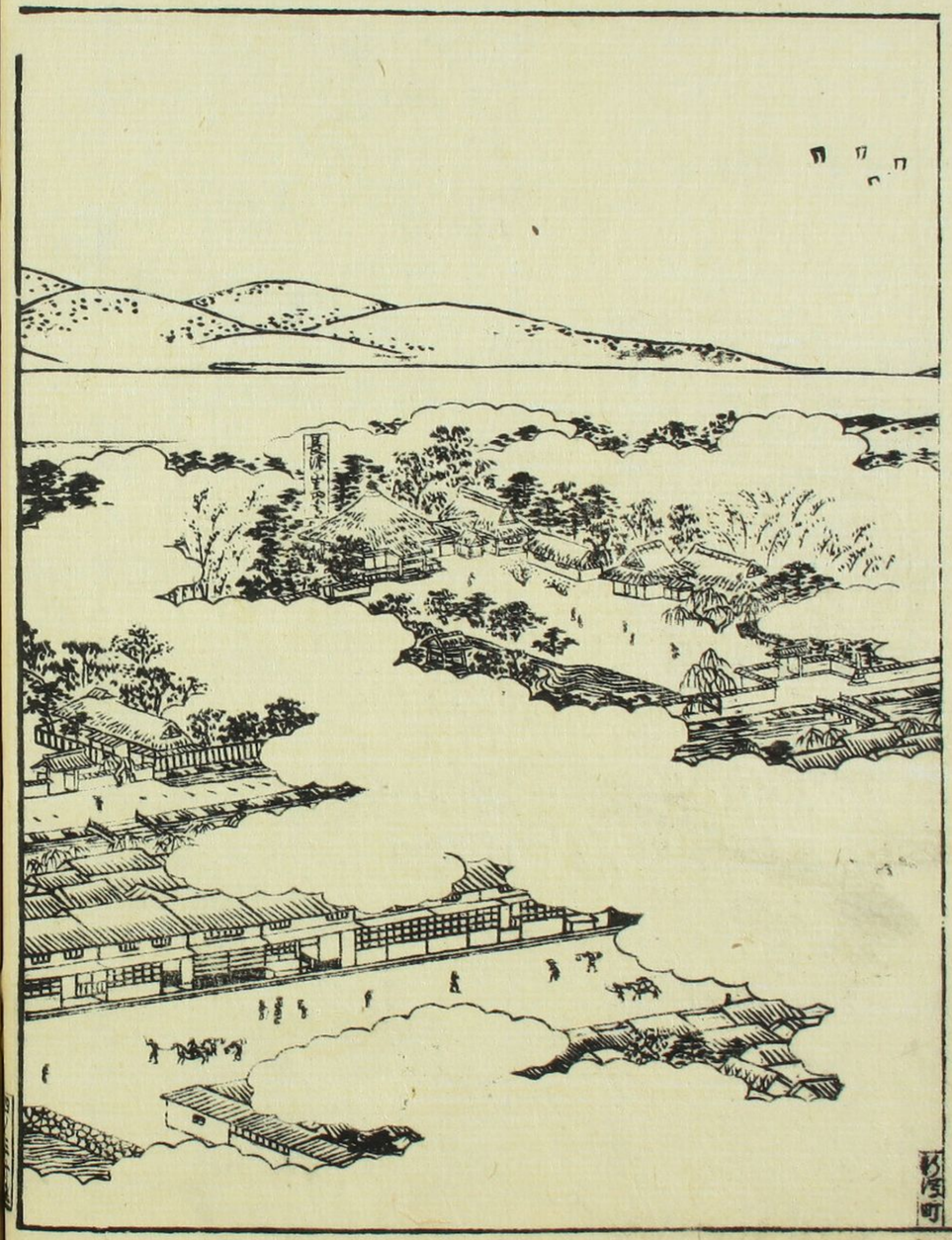
北蘭山西方寺　東流　日所ゝ〳〵

鳥屋流と号ス本堂十二間ゝ九間　右ゝ〳〵逆竹の御舞流

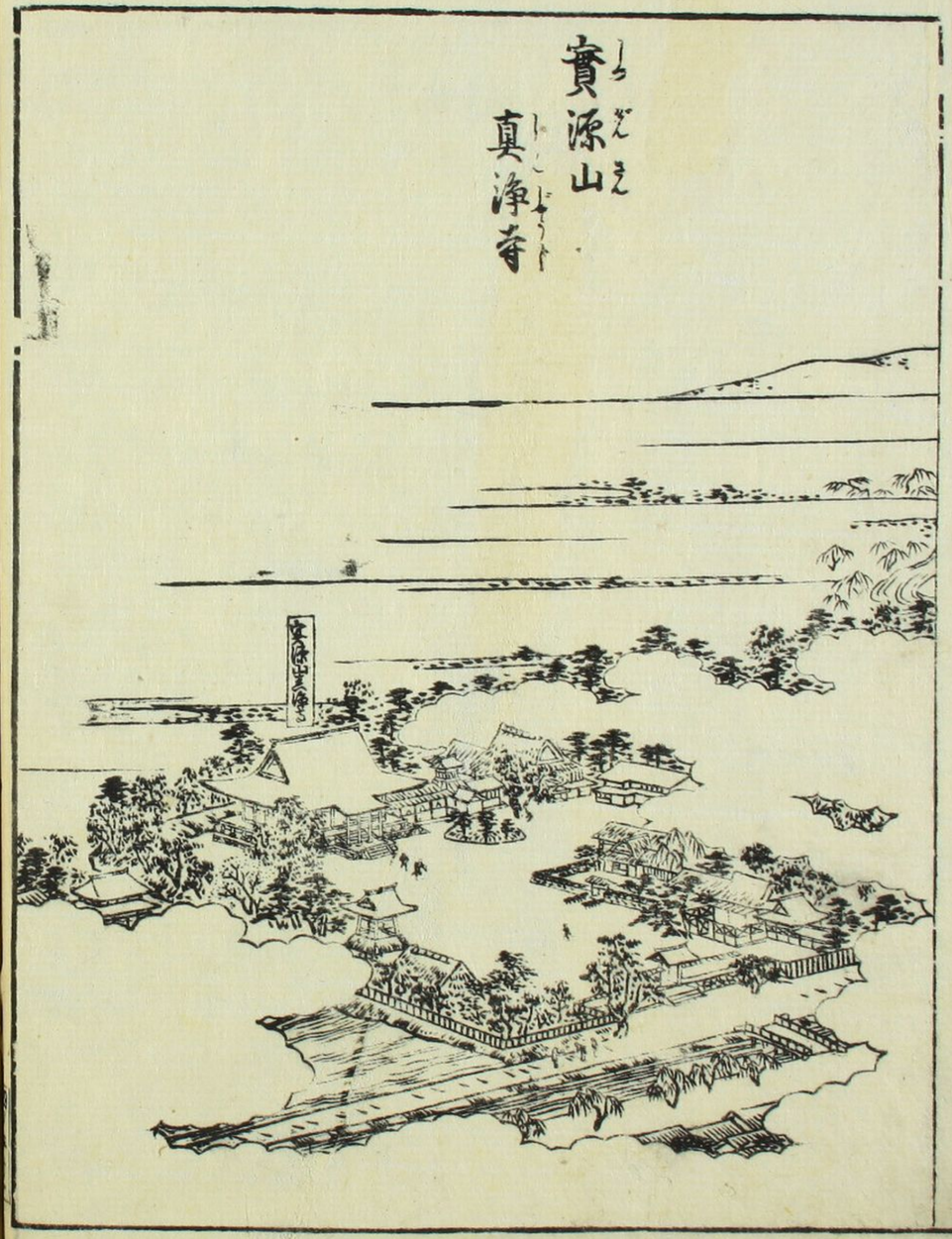

金波山
浄光寺


新深の渓


如山
浄光寺


長源寺

實源山
真淨寺



此院の支配所也此寺より八所嶽竹藤竹一重竹くく逆竹の類
より出さる孫竹と傳来せり　高祖御真筆十字名号を安
置　畫像本尊の二幅蓮如上人御筆　御傳繪拙筆如上人の御筆

北山淨光寺　西流　名屋坂の一里彼岸の

本堂十一間に面僧坊二區　人皇八十代の聖主順德帝の
勅願所也本尊阿弥陀如来は日帝の勅願安産の霊験あり
一永元元年丁卯より高祖聖人當國に入ケ年の間在國坐して
名屋坂の里に一院を御建立の上御化導ありて彼竹樹を
根芽のせ〳〵寄特遠近より宗へく諸人参詣のあひをれし
系諸群集をなす誠に繁の集るが如し其形〳〵兼久三年の
暦仰德帝依國へ遷幸ましくく聖人の化導逆竹の奇
特名叡聞に達し此御坊に御幸なせ給ひ聖人より御

新潟
三ノ町の
富屋ノ
圖

教化を受け給ひ法文を念佛往生の安心を得給ひ給ふ
ゞ帝流嵯峨仰のごとく震轟と下て鳥屋地浄光寺と
勅額を賜ふ又御寺の御本尊黄金の弥陀佛と山院を奉納た
まふ御製

うちなびく玉藻とけてたゞ寄るの名屋地の名さぞ霜降ん

これ今の名屋地蓮行の御坊の嘉地なり中古世縁みつく浄土
山所を移し高祖開建の御坊吸徳帝勅願所と相續をとゝ
○蓮如上人遺徳記の一に曰光師三十五歳乃至そもゝ北山鳥屋
地浄光寺に入給ひ法を見給ひ宗風を変へ給へり
とあり○霊宝品目録第十字名号 祖聖人御筆○位牌室中の阿弥
陀佛 目御○六字名号 法然上人御筆○若年法然尊の御願 目御筆○蓮如上
人自畫御願○目上人名屋地の御書 蓮行 光即敬称なり

の行 黄金の弥陀佛 吸徳帝御寄佛 ○吸徳帝鳥屋地御詠歌 御震轟上

金波山浄光寺 西流 名屋地より一里彩浪と云

尚寺に彩浪鳥屋地浄蒲系浄光寺と号く彼名屋地所林の
御坊より山地を引移る所へ山浄光寺と目出緒の寺み〻
御系つゞ蒲系法介相續せるなり目所目号る故に山
山浄光寺と号し蒲系浄光寺と号くるなり○高祖真蹟
十字名号 御光の中に十二光佛 ○弥陀の名号 法然上人
蓮如上人 御筆
の御筆

赤沼真浄寺 東流 目所上ま〻

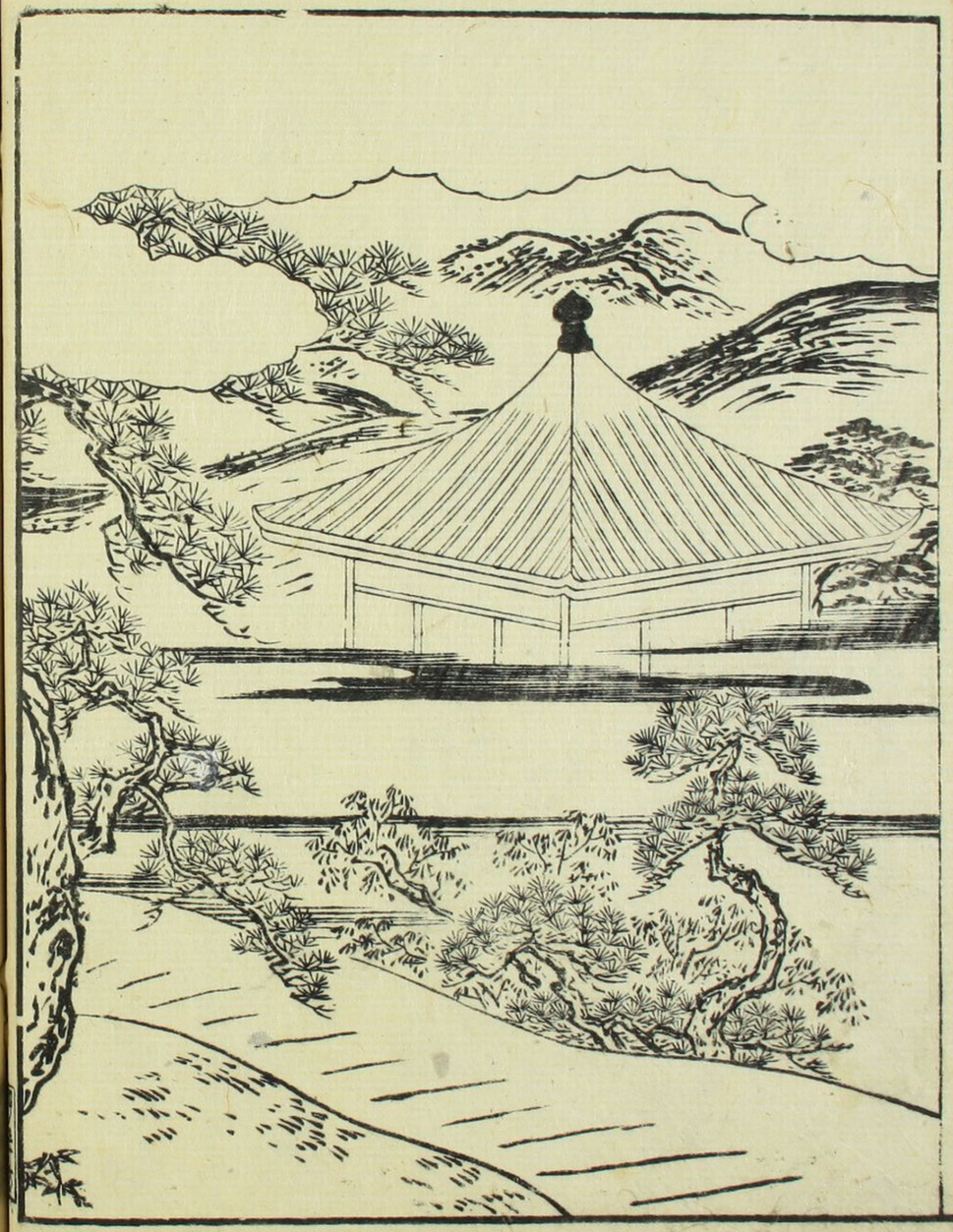
尚寺に聖人の御筆の明慶坊の開基之抑明慶坊の俗姓を
常陸國の住人土屋又郎重行と云源氏藩代の勇士なり
偖老目宗の妻を娶ひ孤兒の安念却て教善拵心の若縁

また二晴の
景色
此川の
両岸
河骨
一面に
あらそ
いさく

[illegible]ゆえに出家道世の[illegible]より尚國頭郡[illegible]過[illegible]人の所紹
ひとまして[illegible]に高祖聖人尚國の御産て御化導
[illegible]せ給ふ[illegible]を[illegible]既に彼[illegible]に[illegible]即聖人の御教導の[illegible]
速に信心了解して真の御弟子となり法名を明慶と賜りて
[illegible]しく聖人東國へ[illegible]給ふ附属奉り信州水内郡善光寺
[illegible]聖人諸人信
[illegible]仰たてまつる者[illegible]聖人の[illegible]
[illegible]諸人御名[illegible]聖人
明慶に命じて宣く汝[illegible]予が代[illegible]念佛を弘めべ
[illegible]門徒の最中[illegible]明慶の教化[illegible]
異[illegible]と[illegible]給ひ教品の御讓物と賜り明慶師
命に背難く[illegible]に留り一宇を[illegible]して真淨寺と号し

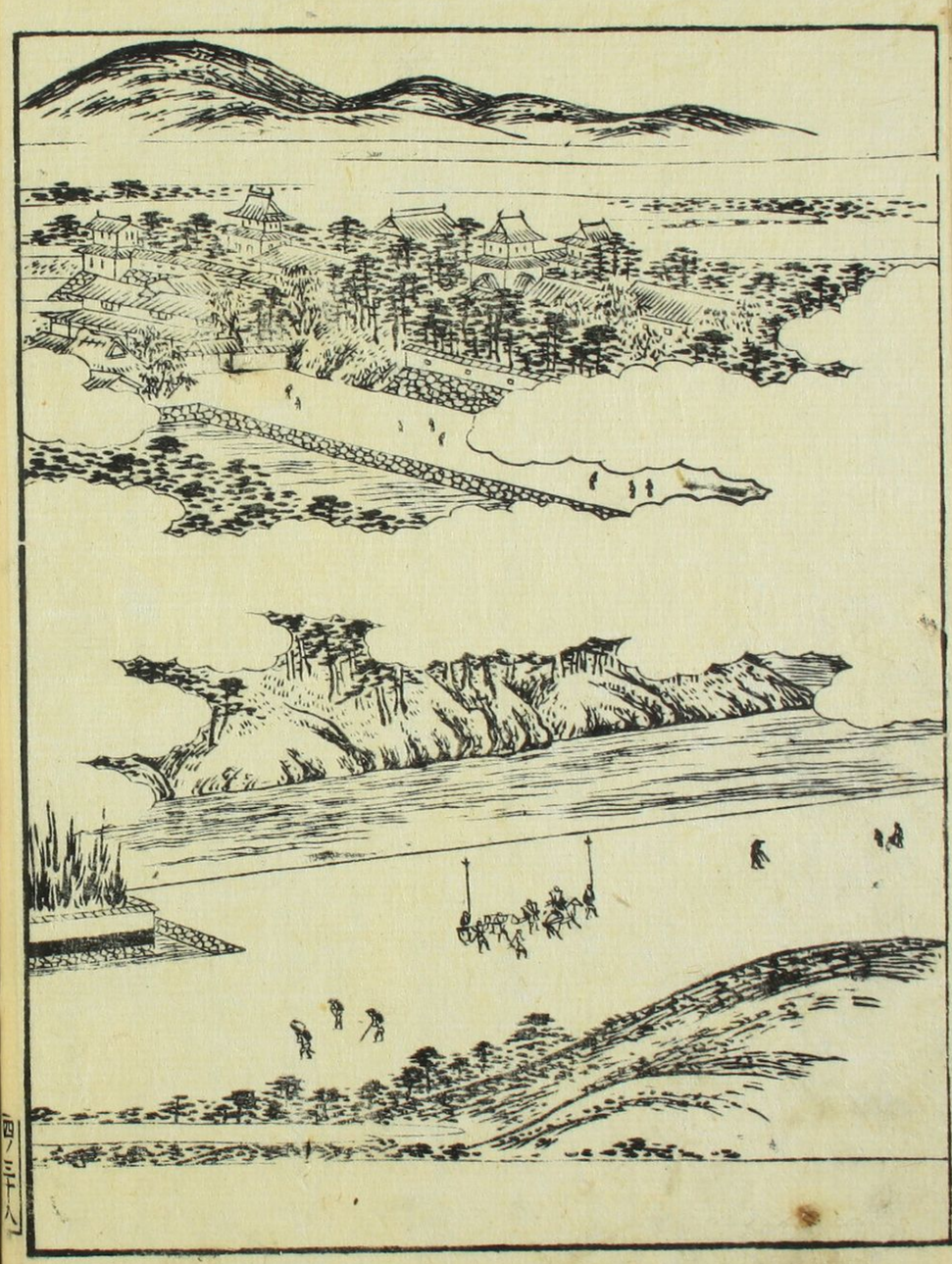
寺を真宗念佛を弘通せしめ[illegible]中古世謂[illegible]寺を此[illegible]
後[illegible]ぬと云云　宝物と宣[illegible]の像聖人御作　十字六字名号
聖人御筆　茶碗[illegible]　番合[illegible]　服[illegible]寺宝　以上高祖より明慶へ賜人
此外霊宝数品これを略す
長崎山真宗寺　日所より此寺蓮如上人御奮筆
城後の國小國より此彫を始め濃く[illegible]小國第一[illegible]の御[illegible]
別して東西本願寺御末寺の寺院数百ケ寺[illegible]寺院[illegible]寺[illegible]と
[illegible]る祖聖人の御生縁ある寺院[illegible]
り國[illegible]を準[illegible]
○彫深い城後第一の大藤[illegible]て[illegible]教[illegible]彫[illegible]尼女の[illegible]諸國
の商賈入つどひ藤中の風情妓婦の[illegible]を得て[illegible]
[illegible]入津[illegible]或は海[illegible]南部松前の遠國へ往来[illegible]融通自在の繁昌なり
依て本堂　彫深き六畳[illegible]依て本村[illegible]
[illegible]聖徳[illegible]の御像[illegible]て高祖聖人の真影也御長二尺五寸

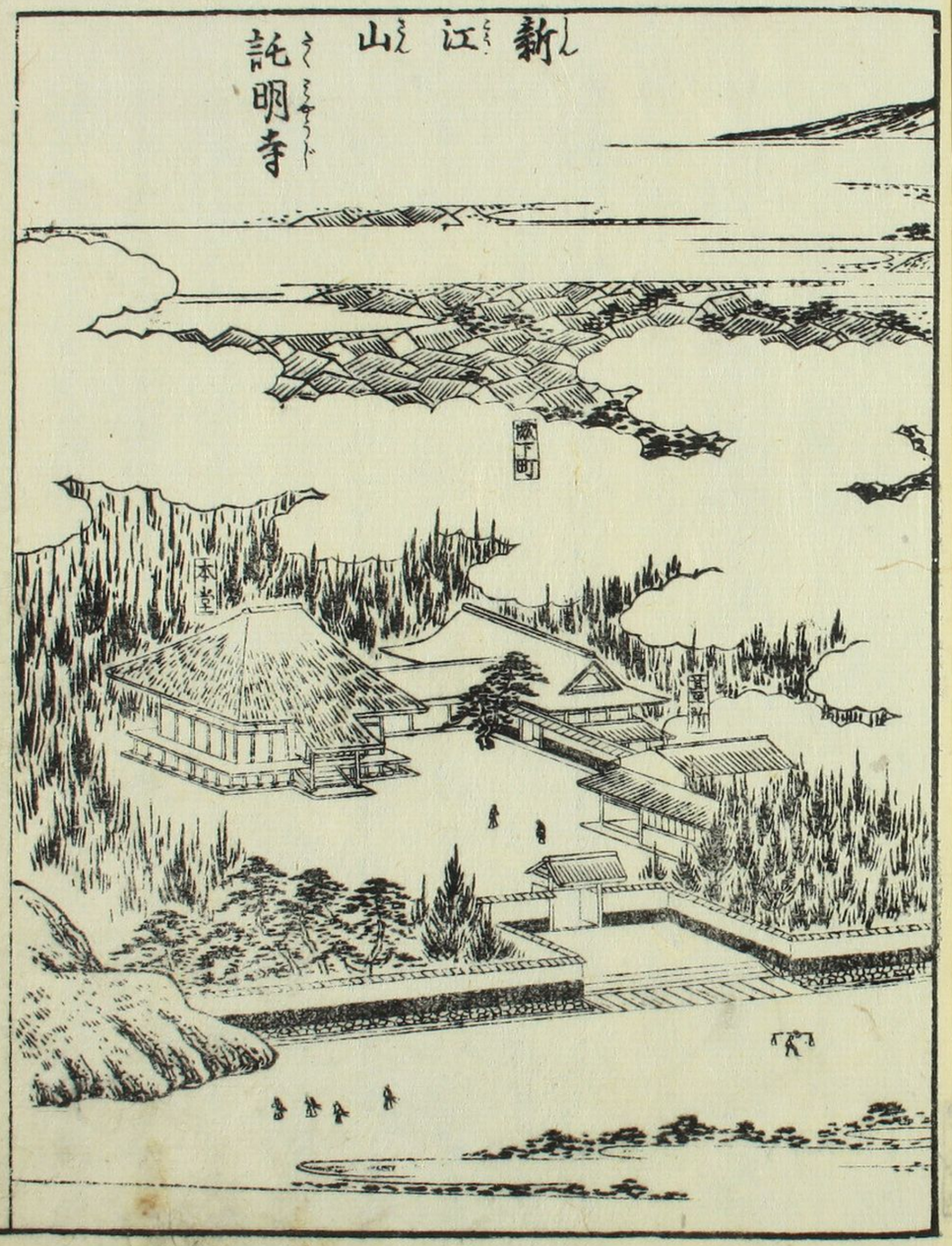
聖德太子
靈應



揃いたるく在況武蔵国郡こぞりて家をなる彩数田の講に信濃善光寺と
信仰あるく供料八石を寄附せり是以元禄年中の比彩数田の所とろ
義父ありて一人の貪き百姓ありて夫婦が中なる三人あり又八旬に近き
老母ありて食も日毎に元素夫婦ともに堅固の信者なり
なれども一人の先世の悪業みやうなんにて貧窮せり
去る程ども心は宗旨の接に背かずして神仏に祷と彩ども
つゆ伝にもせざりしが年く困窮して一と芽をなりく地
所へ奉る年貢金そこなく未進になりなんが不の所業と
元智地所へ納めなれども程なく極月中旬に成て所方か
数度催促せりが夫婦稼く心を碎くとも金なる儀ひなる
く計になりてなるく急難と
なりしが十又歳なる娘の日比殊更押しく孝心深

きものとなれば去ろう両親の幸若氏見聞くに及びしなるを
極女に貴白し其代を以て備金と儀んとひ兎めて此事を
親に申なる小夫婦の者を親きなると貴んなる去ても最後
に悲しくとふとつくなる年老なる老母の彼備金のなる と楽ば
ひ給ふに女ひとりなるに足洗なく其が河に投ひ
て極月廿日又義父なるく娘を誘ひ連て彩深の滝に
細者の者をたのく又年と限り彼女を極女に貴て其價の金
を請て心なるに娘に別て彩数田へ帰る比日もなや七つ刻も
なひなれば笑たるやう急ぎなる小彩数田と佐く本村との中程
にて暮やすに日親のなやくも山の端に沈を深しなば孫く
心いそがしく帰る極しも人家を敬て一夜の宿人三
人に遊なる小河も明けば義父を捕へ首をなけれる金なるを




新江山
託明寺
本堂
寺宝所

葉ひろ〳〵と茂り成れる木の下に立ちて天を呼び地を招び
てさま〴〵歎き流れども更に盗賊ども耳にもかけず
追ひ行く人々何国にか行くらん十日ばかりの間に盗人どもの先に立ちて見えし
ぞひ色し金をとられし成る人々三人ともおぼしき人々は彼お弁う
ちとりかの人々阿弥陀佛と信じ奉り命を捨てと云
返〳〵得さしむる也尚行きたれば彼こ本の古き堂り
吟霜と曉〳〵て帰るべ〳〵我い彼堂に住りの人〳〵かゝることを
〳〵て帰りて成る成い集えし金再びむいくし給ひるのみを
雖さ骨髄に徹〳〵忘れて彼お弁の名も易行に深く感謝の
言葉も盗さ〳〵て帰せしものとて虎言せんと急ぎ彼
本堂に参りしが堂の辺りを見ふ彼お弁と見しき人も人人

ぞりそれが堂に参りて横ふを物語りて左横のお弁の人や聖
とりつゝ米寄歎息して云ふそれを心〳〵なるうてお
もとり先堂に入るる像を拝を参りまよりつゝ心付てその
俗なるの為像を拝を参りまび初ゆくも古の御姿の流の多
く付く物はりの小ぞ弥陀なるの御化現して急難を救い給ひ
〳〵を為雖くもい成る成るの堂日彩数回帰りをぐさま左
座のもとに備金の糸返〳〵彼なるの御利生を勧びまう我
元来なるを移はしるるれど弥陀佛を信じ奉る成るこの
ましい〳〵来をもへいよ〳〵たのもしき弥陀の大悲うりとて
信心たくはしく怪び名世の流方を伝人学て人〳〵成るとあ
まねく名成功弁を幸ひを得く後年大福人となりかの
娘も徳の高き人なる生せり是れ弘の上なりるとや

これ実に現世利益の御願文と肖合せるものなるべし

新江山託明寺　東流　俗に東村より一里　彩数田村よりあり

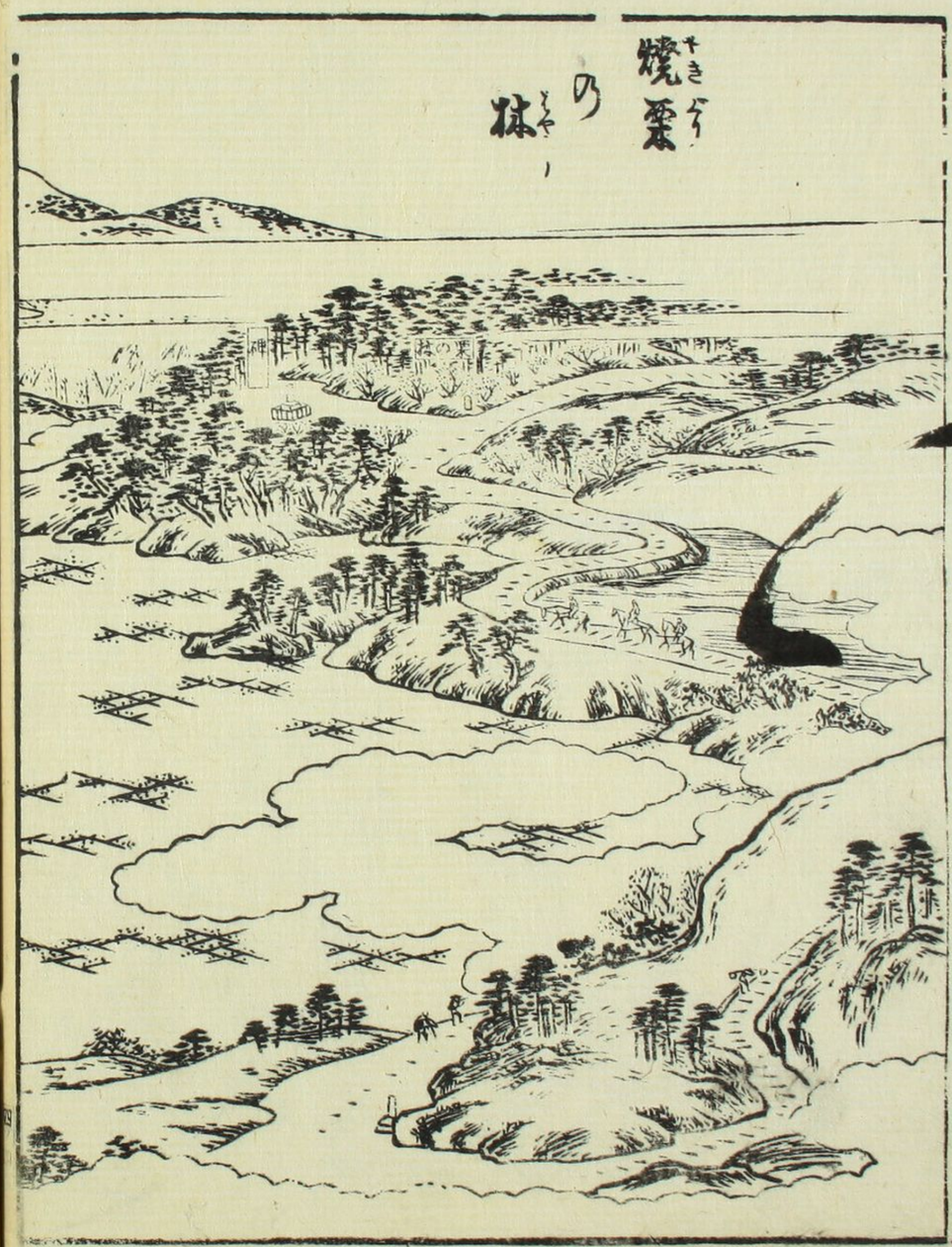
堅固院託明寺は開基祐玄法師也本堂十間に面本尊阿弥陀佛　春日の他　胎中三ヶ寺　抑当山の開基祐玄碩徳の俗姓は平氏小松内大臣重盛公の家臣秋長別当真盛の子にして元と秋長入道の後より出家し天台宗にのび坂本西教寺に住職し弟子を教長といふ法相宗を宗とし南都東大寺より住せしが学功年を積て後故郷へ帰り先祖追悼のため小誠系の国彩江郡に一宇の精舎を造立して善く弘法せり祐玄は祖聖人親鸞の御下向の砌其高徳を慕ひ来りて面謁して開法陸奥のこひ渡りに従て御弟子となり法相唯識の微旨を捨てひとへに専念佛の一行をこそ年齢八十六歳にして病

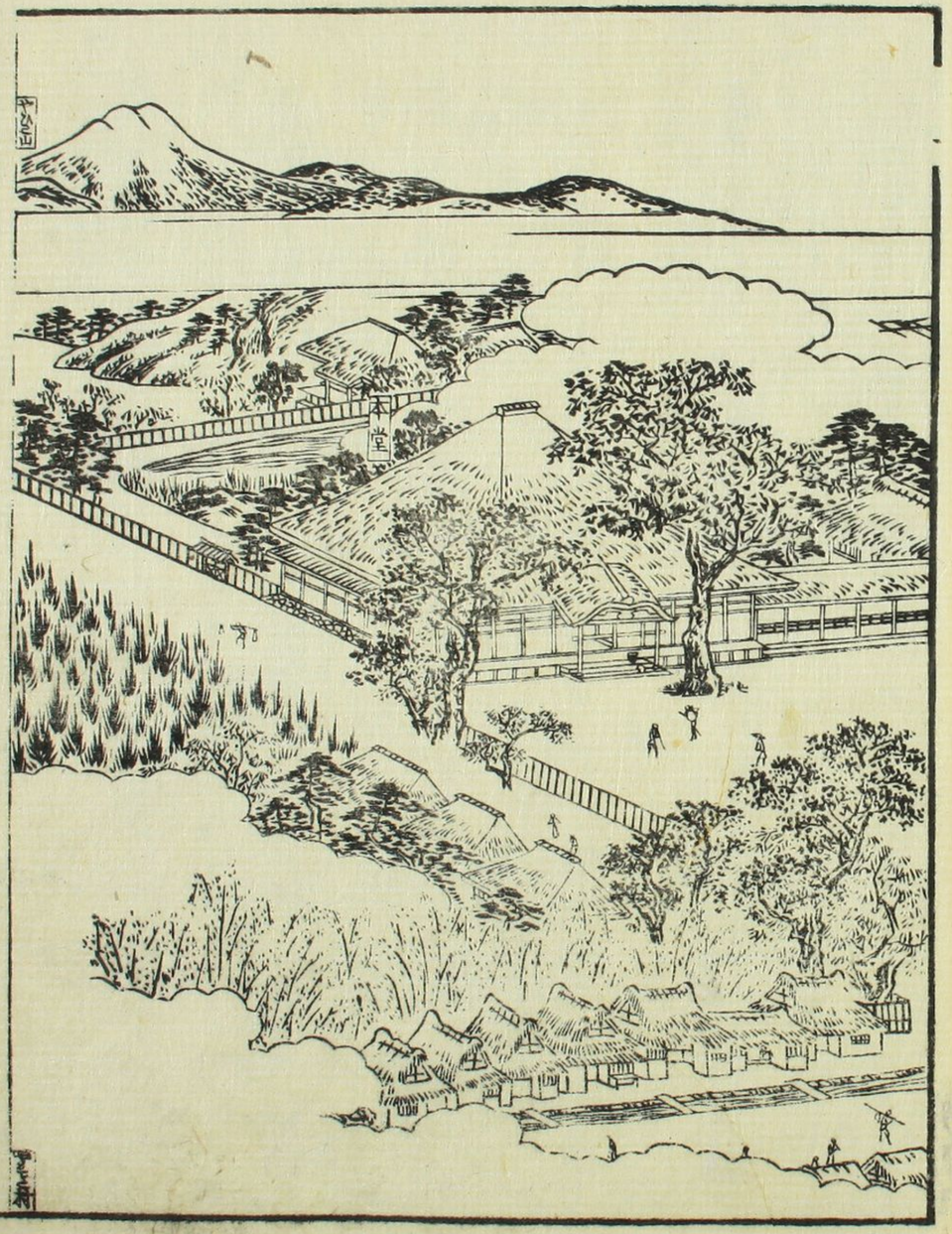
ゆゆく門徒に対し佛恩の廣大なるゆを説き孫名の夢記方よりはえく往生の素懐を遂らるる其後師弟相兼退隠なり其中古田郷みなく加賀国大聖寺に移住せしかども御教を溝口伯耆守御領地みなく山彩数田へ御移住の時陀経して山地に移居したまふ善提所なる故とこそ〇本尊阿弥陀如来　春日の他本尊教如上人の寄附　九字名号　高祖聖人九歳の御筆

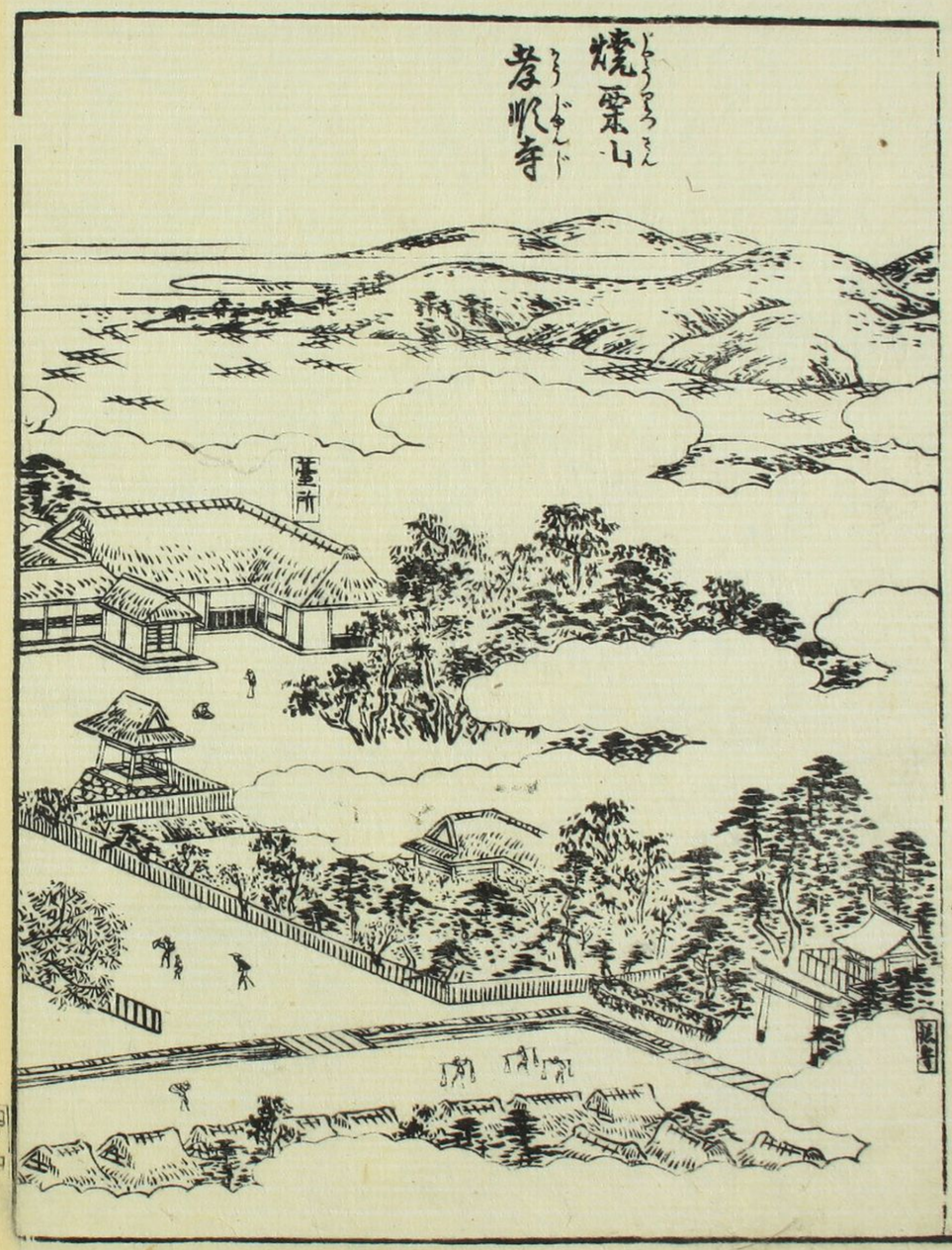
三度栗　又焼栗の御舊跡とも云　堅固と彩数田の号

山御舊跡は堅固焼栗山孝順寺文祝不と往昔高祖聖人彩田の宿と往返しに給ふ附武女焼しる栗を聖人に進ず奉る聖人御弟子達にこれを授せ給ふ大室しらふ不人移るのゆゑ山を出て水よりて暫休ひ給ふ附彼栗の焼しる所を出て石上にて御弟子方へ与へ給ひ給ふ村へ二ツ三ツ落ぼし給ふと拾ひ

下駄後の迹
雪ゆゑ白き
急ぎく徹徹
せう其ゑ白み
ひごゝ
白雪のさう
感トして
うまるカラビ


燒栗の林


本堂


燒栗山
孝順寺
書院

ゑうせ給りぶして仰らるゝ我今もむる所の弥陀仏力本願
の法末世に聖人多く出て天下に満ち極重悪人の弥陀本
願に乗じて浄土に生ずるものの実多くば今こゞ出こゝる燒
栗根茅を生じ余も年毎に三度の葉と結び度の栗林
とあべきことを思し給へに果して此栗高祖の御誓言に遠ぎ
年に三度の葉と結び繁せり実に拙き凡人等の恩
ひに信と弥陀聖人の御教に遠りぶ凡夫往生露斗の願ひ
なしと渇仰外なうぶ感涙信を肝に銘じ今数百年と歴こい
へども聖人の御誓ひ虎しうぶに又所の間をべく三度栗の林
とうまうちまぼ永不成佛の二乗は佛果を證もうのみ
悪逆の凡夫五障の女人いそう解脱を得るの附なうんや我るに
弥陀証世の悪報佛智不思議の妙要を信樂もう所いれ夫女人

燒栗山孝順寺　三度栗之圖

此栗をしめ花ひゝき実をむもとび
るの栗の栗のかうたるのるし
其実の大きさるゝ所どよりあり
るぶ先の実よりめしとの方
三葉の花を用き実をむもとび
此実のるゝの大きさ
るれる附いえしめむもとび
たる一葉の実いるの其
いが破まゝ栗の実
外よりうまれぬ此附
樹の末に分三葉の
花ひゝき秋く実のまう
秋冷なるゝ深ぶ年に三葉
の花に実うゝざるもあり冷気
遅き年に一二三の栗自を遠ぶ
悪く実のるの深き樹と謂ぶし

生うのこうし沢いぶの外ちがしこう
栗のさんたもんたぶく
さんぶがう焼こう栗の
ぶ〜〜其実と生まそ
皮をこれが荒皮と分く
深うもとろろくこうるん
毛もと焼こう栗のありさま
実の大さ二歩いをぐれて大きく
二歩の実い毛よつぐ三歩の狐ゆ〜
圓と見えく其大概とまろべきかり
○八房の梅い小樹の長照寺よあり
八重の紅梅の花一輪よ八つの実と
むらぶ毛即聖人末代の衆生として
八歩の蓮華よ生ぜーろん
即拙云伯方

八房の梅の圖

虫よ安楽羽よもろろ塗ば焼種の栗の芽とし拾ふ花の咲
出るごとし 作人ろこれを結ひろふる元
焼栗山孝順寺 東流 彰義田より北里余保田よ立
本堂十一間よ九間○高祖聖人御真筆布の名号と妻亜せり
当寺ハ上地ケ京三度栗の紀ものり文三度栗逆所の霊験の
ものハ高祖聖人小陰東関よ帰り化して化と元信よ遍益と衆撰と
施し給人孝御在世の衆生を導引給人のこと郷び滅後教よ
厳の後其説法所しく末世の凡夫を度し給うんがるもう
玄祖よ此孝順寺布の名号の来由を尋ぬれば兼元元年高
祖親鸞聖人当国へ左遷とるせ給ふより建暦元年勅免
を蒙りせ給ふとよケ年の間小国よましくて御化益専ら
ろう玄日此保田村の漁邑分田村ろよ里よ入て法縁を結

だんがゐ家毎に餅を乞ひ給ふに此星慳貪放逸の族のことに
たゝく一紙半銭の施しをもとめ給ふ（一説に達磨元年の頃とかや）
家に老女あり頃日の小屋に布機を織居るが聖人と見
奉り戸口に立て出でいふ小僧幼者今日い我主人の周忌
に当る暫く休ひ給へかしと供養致しやどりとらふに聖
人心に歎びたまひいとれ慳貪なる星の内に殊勝なる言葉
を聞のよすがに彼茅屋に入給へば老婆何とぐるとなく燒る栗と
云物聖人に供養し奉る聖人二三ツ三ツ召上り老女が志の厚
きを感じ今此老女一人を添度せばおそらく此星の諸人佛法に引
導とゝのべき基なるべしと云ふ故老女に對し弥陀大悲の誓約女人
往生の理を説き給ふに御教化在しければ老女が宿因の熟する事や
忽ち陸地感嘆の涙を流し信心決定を喜び得て思い除じ奉る

老女本名の名号を賜はりしと親ひ奉れば聖人仰せ兼ねて
せうと即書をんと紙を求め給へと元来貧窮老女なれば一紙
とくも給へと乞ひ給ふ老女たちまち立ちもとめどんどとて手織の麻
布と刀を出てどいと裁代に裁ける麻
は弥感じ給ひ御涙を流し給ひしと聖人よりけ
賜げもとゝ裁代しあるる毛貧女が誠の信心深ゝ涙とゝく奇
特の志と歎ひ給て御筆代深させ給ふ上いまの名号を
書して与へ給へ老女い早代合掌して既の限りなく落涙
安座して貝善小光と名る敵しろ毛すりの孫お續三百余歳
去嶺の徳光都鄙に耀き本山に安へて専念寺と号へ奉る寺号
と賜ふ其後打〳〵に寺と称し数多度ありしが其無
寺号と改め賜る宗祖の寺号い専念寺第二い親鸞寺第三

布乃名号
の由来

い長福寺第四に本願寺第五に光明寺と不易の寺号を免許
ありて宗の佛圖を配立したまふ○六字名号 布の名号と弥陀
像配立先の配立 ○九
字名号 紙絵流聖人の御筆 田中統後等有之 ○八字名号絵像弥陀 釋圓宣 の賜る ○御自畫
等身御影 頭如上人 御請到 ○上宮太子の像○竹布の弥陀佛 法然上人 御筆 ○高
祖御本像 蓮如上人 の御作 ○蓮如上人自畫御影

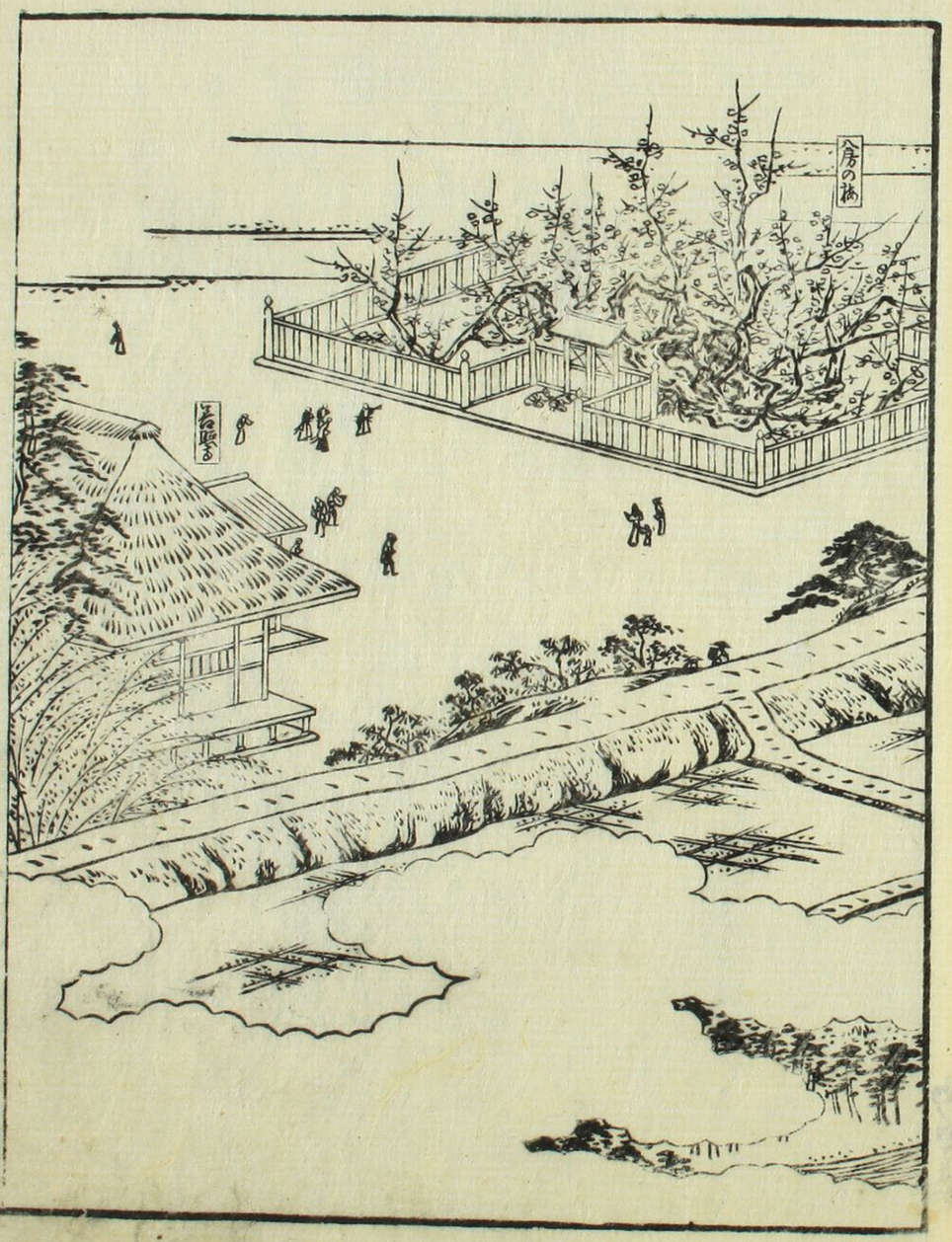
○寺記に曰此老女は淺辺綱が玄孫源二郎と云る忠武猛勇の武士の妻なり
郎は源三位頼政が流一の臣なりて頼政高倉の宮の勅令を受て
平家を討んと軍勢を集ら終に宮を奉り國々を治郡に對陣し武運拙く
平家滅亡せり此時源二郎も戦死しとの小字治川に戦死し給ふ
其妻娘都と成て小國に隠れ給ひ終に舞後國に多田村の里に住て
ひそかに夫の周忌を営むるに則ち頼政と郎が命日
なり此時建暦二年と云て三十三年と成る
そ治暦に年号治の合戦より此時建暦二年と云て三十三年と成る
夫を慕ひ夫を歎く淑心の儀〜やさしく高祖聖人の御帰依の
なり加之八歳三位の女の如佛得脱の化益を蒙り安心決定あり

るいあり雖ども生涯動の大名録に名を残すのみなりと

八房梅　安田より分田、十八丁まより十八丁小橋とあり

寺は若照寺と号く東流 日國下條村八房山若照寺の縁起

なり此梅庭前に繁茂して十間に方だりなる石垣を構へり
其中に六百余歳の年暦を經たりと本勢強盛と云て
多重の紅梅鮮に英〜菜い一花に八実を生じ味ひ甘美なる
世俗是を八房の梅と称し一國七不思議の一箇なり
樹根より株数の房形に咲出る樹花に○抑八房の梅と
云は往昔高祖聖人当國御化導の御鳥屋地跡に在しを
御教勧めなる小遠近の道俗日夜に集して聞法帰依をなる恰も
釋尊出世の時八部衆の佛所に徧でなるがごとし実に護摩雲の如く
義とうんぬんなる武宮殿に聖人を帰依なる重みなく適屋諸中さまとけ所



八房の梅

よりて聖人被地に駕き給へ其中給へ小法村法富門に[illegible]
者の家に立寄せ給ひ名しい寄うを大に勅び聖人我茅屋に入給へる後に
待雑き奉るり何とぞ饗應をもてんと心ないさびしくあせ立ども俄のゆゑに
て御供者やはりのもてなれば御に麁飯を炊き塩漬の梅と大根進ぜる
聖人彼が心の深切を感ず勅び給へ肝くきしに百て此梅の実と地に埋め
諸人に教化し給へ弟が今年引宗法の佛智に叶ひ弥陀の本願未代に
弘興し悪逆の凡夫又陳の女人迄て弥陀の御國に生し八宗の宗基に宗と
なるのと拾ひ此塩梅より根茅を生じて末世に繁榮し一花に八つの葉と結び
八宗の祖と崇れ給へ光明法流の光源を末代に長りのと拾ひ給ひ
なるが故に如来の若巧実に聖者の眞言霊路斗も遠ら
て感應神霊にやまし給ひ給へ梅年を経る小法ひ栄人勢ひて
大樹となり一花八実を結びる故諸人奇異のもひに信心

を致し弥聖人の御教化を信敬し凡夫亜八の本願を頼び
今聖人御入寂より七百又十年浄土真宗の教法日々
に盛に昌し年々に増上し善く民海に壮人なるに此梅樹のもげ
ると小刻荷を合とるごとし又生ふる青梅を喰ふ其味ひの酸
し甘塩梅のまひ出さる謂と知給をきなり

宝暦七年の春駿州師圓介御奮法巡拝して此地の里に立寄
一夜旅宿せしが[illegible]聖人実に教を行ひ給ひ恩徳を蒙り
中りて寝ざる小夢の中に高祖聖人に渇仰なり其御面貌の甚
麗させ給へと拝して圓介うつ心に中上るいいに聖人何の御悩
なくてうかく御面像の麗義に給へやと問ひましい聖人の御仰に吾
宗法今壮んに弘布せるとも自力の我執に募て安心を乱れ後人
少うして光を[illegible]まし[illegible]
御詞に衣の袖と続り義心に[illegible]
我祖師の真塩梅と麗給へ御法を開け八房のう発

佛性山
無為信寺
本堂
庫所
鐘楼

と称ずるとなく爰ならずして爰中の流れ枕と濺ぎ
ていまだ乾かざるに〳〵爰のさまをひるがへして安堵せむす
れば〳〵ぶるに何ぞくらの爰の中より仏法欲をつゝ添へよく祝禱〳〵て光
ることを不思議なれ〳〵玄系の極きも知れ爰のまゝを流るゝ
さめ〳〵湖と流れ出しもみな雖く爰へ作る

佛性山無為信寺　東流　八房の梅より一里余　下條村にあり

金剛院と号し本堂八間本尊如来　濕生の他　二十尼輩第十一番
無為信御坊の遺跡也無為信法師俗姓は清和天皇六世の苗
裔伊豫守源頼義の三男甲斐守源義光　新羅三郎と号し　の後裔武田
右郎信義のゆゑ如い麻績の大宮司權限女をもつて奥州會津
郎柳澤右衛尉を誕生し幼年より勇猛英才群に秀で自武田信勝と名
乗同國綾和に居住せり信勝武術を学び山賊多く集り乱妨を企て運んで
一所につゞき古室と造り其中に出家と引入を五穀と拾ひ居たり

みな捨てなり暗くみな〳〵雀二羽飛来て忽ち蟻の王と拾へうち室とつく
き形り集り居る蟻を皆喰ひ尽り信勝これを行着て忽化と歎息〳〵嗚
呼浅はしの世のみ捨て茅屋をきり人間の境界に入り今爰に居住の百姓に要害
を構へ米穀衣類調度を作へ妻子眷属を養ひ永く安住〳〵一方城郭の
んのを新へ拵るに安堵の恐歎来りて忽要害堅固の居宅を
夷形りの代を離しる其分を教害に目下今蟻のみに不全く人間の
業に実なるの已実城大小も色に目下孫子に嚙附世間
く静るに人〳〵人心い虎狼のごとく漸もそれ他人の五穀を奪ん〳〵合
戦をいど〳〵國郡と手人弱きものい忽ち元び強き者い脇勢ひと
振へ他れども身に不又十年の命を保ち者わし我は理と乗人
びしく武をそなへ〳〵勇を欲いさんと欲に滅亡とつゝ〳〵爰の
でれ浮世の中に蟻の造り已に古室の如き苦悩をなさん

まいまく明師を尋ねて来来永劫の苦を逃んとは志
と発願し給へども縁の苦知識の押へまとやしかくよ
を乱と雖ども中さんなる能登小宿智の苦縁実よりなるべく聖
人常陸国稲田の郷に在して寿ら衆生所化等に教へ給へ
とを聞て急ぎ彼地に参り聖人に値遇の志を申上
られば聖人信膳が心のたくはしきを感じ給ひ弥陀観世の
悲願に洗ふ事を浄土に逢へ給へんがあるべしと一心
に称念すれば必定して安楽に生せんと更に疑ひなく細く
と御教誡にあせられるを信膳これを聴聞し忽ち五三の信心を
獲得し法恵の泉に潤せび御弟子となり聖人法名
給ひ即御剃刀を当てられ法名を無為信と賜はりそれより
常陸に住の御弟子となり二心なくして其後聖人都へ帰り

給ふ時法い寺国に弥陀の本願を弘め給ふ代にて衆生を
化益とゞしと仰渡さるる信方師命に背き難く法に
奥州へ下らるる其時歌一首詠じて
捨て来し故郷へ入る弥陀たのもしかるらん
かくうんよまるる信方竟に奥州宮城郡に一宇を造営して
専化等堅んなる今の仙台の城下称念寺の此舊跡なり
後同国会津郡大房若松の近隣と云所に一宇造立し文永元年十月
廿三日七十九歳にて大往生と遂られしと無為信寺に寄く
義意三年同縁にて同国白川郡棚倉に移住し家永年
中陸州田中に寺を建立し家縁にて退隠に及んとした
る因縁年中治癒に再興せしめられしも是も家縁にして棚
倉に住し給ふ宝暦年中御本廟後如上人の命に仍て宮府

紙後と如羽の
埼の大石崩び
とろろ山あり石
崩くして人を
抜とろろ
ゑ〜

の許命と蒙り齒不に再度〳〵永く不退轉うしむることを願
けり○聖人真影十字六字名号二幅○御自畫半身御影弘
安二年八月八日親鸞聖人源信和尚の御筆○七鮮達磨真像
御自畫半身御影寶永三年二月十二日書添え
十高僧唐画○聖人御骨○聖人骨頭御影 蓮如上人御筆
其外靈宝略之

歡喜山正覺寺 西流 下條村要石信寺より天保(三里)天保より明治迄(二里)
大岩より三里長岡にあり日蓮宗田淨寺の
お寺なり永禄年中に記之ごとく
○齒寺什宝高祖聖人御自
刻御真影 八十九歳の御像なり ○聖德太子御像 なる十九歳の御像なりて
紙表に筆を揮ふ聖人御概
名号 蓮如上人の御筆 ○蓮如上人御自影 ○佛舍利 以上傳来
○長岡より上除宮寺妙法寺を通り柏崎八九里八丁
柏崎より高田(十二里半)

板敷山大覺院願教寺 此寺田より無金川浦倉間安塚上方圓平
俗地坂浜川村との巡路を約て浜川村を

後鳥羽院勅願所孝養十二丁巳方みとそ○宝物祖師聖人乃
御本像 御自作 六字名号 如信上人の御筆 ○本尊御裏寺号 聖人御筆 ○高祖
聖人御頂骨 御本山御寄許御添刻 以上傳来
荒井御堂 なる井なる田の二里半
東御門跡御坊より本堂十三間巳面○本尊阿弥陀如来
聖德太子御作
照光寺 西流 小出雲村なる
寺中二ケ寺○高祖聖人祀所御真影西願坊の薩陀羅(二)